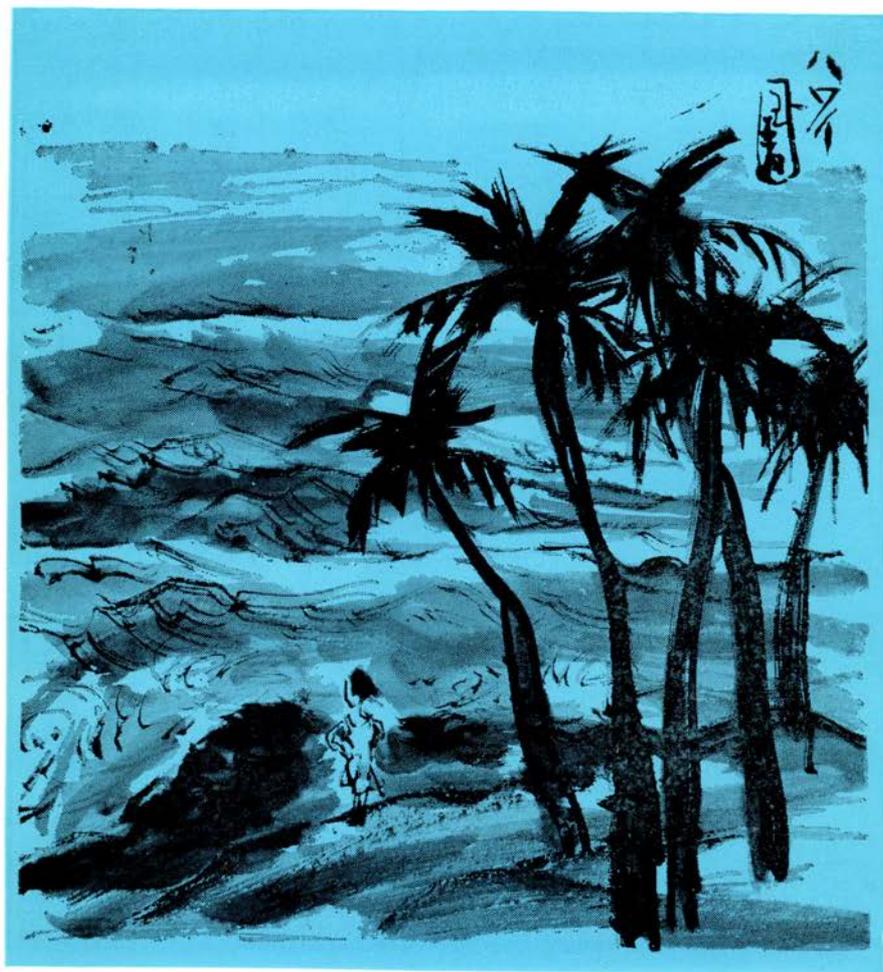


塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年五月二十五日 印刷
昭和四十八年六月一日發行 (每月一日發行)
創刊大正十三年 通卷五五三號



No. 553

六月号

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話(779)1690-2番

川柳塔社同人全員集合!

同人句集『川柳塔』

昭和49年7月路郎忌当日発行

ヤングのための
カジュアルウェア

クラブウ Kurabo Fabrics
カジュアルウェア

倉敷紡績株式会社

明日のくらしの
コンサルタント



TEL アベノ店621-1231・上本町店779-1231・奈良店33-1111

鼻唄で母の涙に耐えてる娘
町の名は知らず煙草屋を右に折れ
偉大なる団結メーデーねむくなり
手をつなぎ心齋橋は初夏のもの
かっこよく一人の聖女見合います

「いのち」

今月号の大法輪に劇評論家の尾崎宏次郎氏が極めて興味ある話を書いて居られる。「玄関わきの椿がうまく咲かないので昨年は化学肥料を与えたら蕾はぼろぼろ落ちてしまつて一つも咲かなかつた。今年は近所の工事現場からバケツに土を貰つて来て椿の根に埋めてやったら、蕾がふくらんでも落ちず、きのう一番上のがほころびだした。肥料よりも土がほしかったのだなと思つた」とある。人間でも幼少年時代からテレビや漫画によって要領よくかすりとつたような、或は新幹線の窓を

通して出来たような即席人世観のまま大人になつたとしたら、ほんとうの「うがち」とか「軽る味」とか「ユーモア」とかの華は咲きにくいだろう。尾崎氏が言う「肥料よりも土」という事は、結局土にはいのちがあるということを意味すると受けとつてみると、川柳畑にこそ、若い時代からのいのちある土をうんとつぎこんでやる工夫と努力が大変必要である事が判る。しかしその土探しが容易な事ではない事にも気付くのである。



幹主庵生々への祝辭に除幕句氏之助
(カメラ岳人)

中島生々庵

川柳塔六月号

座右の句

けちで良し気が良くてよしみな我が子（文 秋）

私の句

岬まわればもう故里の波の音

宮尾 あいき

川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

いのち

柳林の七献人

川柳塔初篇研究……（百十九）

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸

博美・藤井和雄十府・岡田甫

般若とお多福

川柳塔（同人作品）

水煙抄

一分間の柳論

秀句鑑賞……（同人吟）
（水煙抄）

写生句について

眼鏡談義

西尾葉……（40）

中島生々庵……（1）

西尾葉……（22）

東野大八……（24）

若本多久志選……（4）

北川春巢選……（30）

福島鉄児……（41）

村田瓢太……（57）

石川侃流洞……（61）

正本水客……（28）

浜田久米雄……（29）

戸田古方……（26）

柳林の七献人

西尾 葉

僕は竹が好きである。庭のあちこちに竹を植えている。この竹をうるのに、家内ともめたことがある。というのはい、昔から竹をうえると、家に不時災難が起るというので大反対だったからである。それから少時して、どこで聞いてきたのか、竹をうえると、その家の主人公が浮気をしないというので、家内は欣喜雀躍して賛成した。それで門の格子戸を開けると、正面に七本の孟宗竹の青い幹が真直ぐに立っている。応接間には、二尺に六尺の扁額があって、竹林の七賢人が彫刻してある。どこまでも竹で通そうという魂胆だ。御承知の通りこの人達は世上を厭うて、趣味と風流に逃れて清談をこととした人達で、僕の最も渴仰してやまない人達である。そのもう一つの理由は、彼等は酒が好きというより、酒豪であり酒仙だったからである。

嵯康、阮籍、劉伶、向秀、山濤、阮咸、王戎の七人の中で一番年長者は阮籍で、一番の酒豪は山濤であった。

阮籍には、こんな話がある。彼が碁を打っているとき、母の訃報が届いた。友はやめよ

(川柳中山道六十九次……(5))

近詠

餌だけで

柳界大同団結への道

“当て込み”仕掛人

猫への土産

熊野路を行く

きのう・きょう

阪井久良枝翁と私

デイスカパー東海道

雅号ぶっちゃけばなし

初歩教室

大萬川柳「ひがみ」

柳界展望

本社五月句会

各地柳壇(佳句地10選)

柳壇「久しぶり」

一路集「代」

庭「読」

編集後記

富士野鞍馬……(38)

諸家……(21)

高鷲亜鈍……(27)

池口呑歩……(42)

不二田一三夫……(44)

光武弦太郎……(25)

高杉鬼遊……(46)

本多柳志……(47)

土井浩輔……(51)

橋高薫風……(47)

福田丁路……(59)

林野魁光……(63)

本田恵二朗……(50)

川村好郎選……(52)

(新之助)

(庸佑)

児島与呂志……(56)

舟木与根一選……(62)

平田実男選……(48)

森下愛論選……(49)

(二工夫・葉子)

座右の句

こんな玉ころがすだけにあるルール (白柳)

私の句

のんびりと牛 噴煙に逆らわず

浜田儀一



うと言ったが聞き入れず、一局勝負をつけてから、酒二斗を飲み、それから大哭して血を吐くこと数升という。中国の一斗は日本の一升位にしかならないが、彼は酒をのんで血を吐いて、やせ細ったから、阮籍は親孝行者だと言われたさうである。彼等には、それぞれいろんな逸話はあるが、紙面の都合上割愛する。

さて、川柳塔の同人の中にも、柳林の七献人があつたらと思うて指を折つてみた。

先ず第一の合格者は、備前の国は岡山の産で、その名も高い浜田久米雄氏である。続いて、恵二郎節の本田先生だ、次は丹波の国は篠山の小西無鬼大兄、四番手は、北陸は小松の住人伊藤茶仏詩兄、遠くとんで陸奥の国の工藤甲吉雅兄、ひる返つて今度出雲の国に、めでたく句碑を建立された尾緑之助氏。おやおや灯台元暗しで地元、川柳塔社の生々庵主幹を忘れていたのには誠に申訳ない。先生は山崎クラスだ。之で七人になつてしまつたが、飲めばすぐやかましましだが菊沢小松園君をいれないと、愈々やかましいだらうし、斯く言う、水雞庵菜もいれないと、酒仙や酒豪ばかりで、幹事の役をするものがないと困るからいれておこう。おや!!どこか誰かを忘れてはいませんかと言う声がある。締切に迫られての思い付の柳林の七献人。十献人でも、二十献人でも受付ますから、我と思わん者はお申込みあれば之幸い。

七賢はどれも一ふしある男



若本多久志選

桜井市 岩本雀踊子

早朝のゴミ箱あさるも女犬

秘め事の重さへ女の私語となる

脱皮の出来ぬ女の厚化粧

嘘持たぬ夫婦であくびうつされる

倅を逃がさぬ女の小さな嘘

美しく見せる素足の爪を切る

倉敷市 能登原白水

それぞれに巣立つ時代の外にいる

採点の赤鉛筆を重くもつ

太陽の死角で生きている女

ねり返す牛かげろうに目を細め

捨て石となって希望の芽を育て

空白を埋め合う仲が美しい

大阪市 小出智子

木っ子と二人の旅

二人で眠るこの子を生みし日のように

潮騒を子守唄とも聴き眠る

子の夢は水平線のその果てに

子の甘え旅の心にあたたかく

二人きりの夕餉に父を思い出し

すでに母と風呂に入らぬ子となりて

大阪市 正本水客

山せまり思い思いに桜咲く

気詰りな人と小雨の道つづく

よもぎ摘む老尼は指の美しき

露天風呂

湯煙りの行くえに椿の花の白

山の霧 湯煙りのなかへ降りてくる

大阪市 有信新之助

偽り多き世になんの四月馬鹿

終電で帰る頭上に猫の恋

未婚のやつれへ言葉を撰るコーヒ

老いて子に従う性とも見えず

不倫の亡母を許せるほど女知る

青森市 工藤甲吉

公害日本「怨」の旗ひるがえり
こればちの事へ男の意地という
ネクタイを買うこともなし定年後
いつからか亭主は恐くない女房
少年の頬馥郁と匂いそう

神戸市 仲 どんたく

うたかたのごとくOL来たり去り
眉青き尼僧に業の燻る夜
いい夢を見ているような棺の顔
去る者はうとしとは嘘 逝きし娘の
春の陽へかしわとなる雛 嬉嬉として

大阪市 河 股 緑 水

雪国はむかし話で夜が更ける
咲くまでは誰も知らない野の花よ
猫だけが寝てる飯場の昼下り
下戸ひとり荷物のようにについて行き
旅なれば歳を忘れることにする

出雲市 尼 緑之助

東郷温泉にて
湖を背に春風を撮る十九人
饗宴の一人となつて最年長
句碑建つ

汐風を吸い松柏園の中に建つ
お世話した人の真心茲に建つ
灯台の許 海猫の群れを見て

神戸市 小濱 牧人
安心がくすりで医者は嘘を言う
決断へ胸の振子が静止する
十字架を負う中年の坂つづく
一カラットの石で男を信じきり
鶯笛青葉の坂を下りてくる

松原市 谷 垣 史 好

主治医にも云えない恋をあたためる
春の海うきうき水中翼船が走り
まだ夢を見ますと亡夫一周忌
業界誌に勤め大志をまだ捨てず
風薫る街は手ブラで歩こうよ

笠岡市 高 木 桃 里

閉山の句(四句)
山閉じた明日へ腕組む老夫婦
いわくある恋 閉山で山を下り
閉坑の飯場に残る裸球
意地をまだ捨てず奥山灯が残り
当分は隣りの空を借りる鯉

岡山県 直 原 七面山

大学出の妻は共産党支持者
栄転の祝辞の中に秘す敵意
柔肌に無限の愛を湛ゆ女
ウインクはマッチ男の心燃ゆ
螢火の匂いもゆかし故郷の夜

岡山県 浜田 久米雄

瀬戸大橋までは生きたいなと話し
満開の花見て欲しい人が来ず

気休めのくすりがまたも買ひ足され

世話好きへまたまた町の役がつき

田植機の唸り見る見る青くなり

倉敷市 本田 恵二朗

ローソクの火ほどの善意美しい

野仏のほほ笑み温し春霞

ハイライト空っぽにした待ちぼうけ

番傘が土間で眠っている旧家

心底に反省用の鏡置く

大阪市 西出 一栄

四月馬鹿恍惚真似て見たろうか

春眠を思いのままも味気なし

春雨にしっぽり濡れた散りおくれ

やんわりとそして肌刺す春の風

花吹雪「ああ」うつくしい空虚感

八尾市 香川 醉々

古寺巡礼

薬師寺の塔が挽歌か西の京

浄土へと続く池あり浄瑠璃寺

きざはしで女体息つく室生寺

夢殿に太子のロマン法隆寺

首塚は言わず語らず飛鳥寺

島根県 藤井 明朗

ペーパーミントおんな心を見抜かれる

ケーキ切る心をよそにハネムーン

冗談が過ぎ潮時のまた逃がし

原稿を見ても口下手たどたどし

人の世話もほどほど世も変り

島根県 堀江 正朗

酔うて寝る悴せ花にまた貰い

指で追う花は二分咲き八分咲き

時刻む子の靴音を待ちあぐね

疲れたと言わずお茶にしましよか

はちきれる笑いの渦に老い忘れ

大阪市 金井 文秋

こんな風邪ぐらいと無理がもうきかず

空気が水が添うてるような夫婦です

なにげない話心の傷に触れ

ちやんと名がありますと雑草云いたそ

山も野もゆり動かして春の音

大阪市 天正 千梢

ぼんやりと自分の正体見えかから

齢五十隙間風寒々し

感情の整理へしばし目をとじる

執心を身軽うしてもらう合掌

人生苦しいから愛で抱き合う

宝塚市 傍島 静馬

母生きてあればとおもう御開帳
ぜんまいを巻いても芯が弱ってる
サインする時点で離婚もう泣かず
入学期すんで神様ひと休み
春風に督促状が乗ってくる

香川県 三井 醉夢

アルバムを繰る傷心の子は遠し
くよくよするなものの芽みな動く
淋しさにふれず夫婦がお茶を飲み
甘えなど知らぬ女に悔い少し
菜の花は食べるに惜しい京の膳

倉敷市 臼井 三林坊

振り返る道の起伏をなつかしむ
重箱の蒔絵に桜ふりしきる
一年生すぐ先生に云いつける
衣食足り竹べらで掘る遺跡
企みをかくす饒舌だと悟り

倉敷市 小幡 里風

心白く洗うて少年甦生す
お人好しにも限界があり貝となる
ある道理息子に解かれていたる嫌悪
鍵かけた思案へ大きな夢がわき
泣ける時泣けぬ男が空を見る

倉敷市 水粉 千翁

大山紀行一句

しろがねの鎧に炎える伯耆富士
青春の砦 雲雀と葱坊主
花道が切れてわたしを取戻し
一日のまた一日の恵み知る
ねじ伏せて勝って兜の緒が切れる

出雲市 野村 岬月

(緑之助氏句碑完成)
松と海ここに川柳緑之助
君と来て語らんいずも川柳史
ピッチあげようはらはらさくら散って来る
ああ戦友いくさを知らぬのが歌い
どろどろな平和の中の軍歌にて

兵庫縣 遠山 可住

長男としてしきたりがわかりかけ
立入禁止写真撮るのによいところ
御厚意を娘を持つ親として案じ
ふる里は小鳥の餌となった柿
恋の行く間強烈に沈丁花

岡山縣 出原 敬一

振向かぬ影を女が追うてくる
灰色に褪せて女の業果てる
背信の日から手綱を離さない
遺言無視取引先の大花輪
銀婚や妻後逸の球もあり

豊中市 戸田 古方

はな咲けば生きているものみんな春
関りのある荷やろか臨港線のどか
人間は人間こんがらがってきそうなり
大それた手つきで打ち掛け直される
白い船お前も春を意識して

西宮市 藤村 女

今日も又浮世の嘘に馴れたホステス
冗談とにげる男のずるい顔
未練なく別れた夫で夢も見ず
水引をむすぶ売娘の赤い爪
独り寝の枕に涙のしみ残る

竹原市 山内 静水

吾が道を行く子に前世をふと想う
大阪のどこかに生きてる子を信じ
孫つれて拜む地蔵のよだれ掛け
墨すってすって心定まらず
我が首をしめる発言して老いぬ

富田林市 岩田 美代

ついに来ぬ人に春は散りはじめ
春が底ぬけ五目ずしの手が忙し
ピリオドになった妬心に焼香する
らしさだけ女と思う女性観
自分見失う程に易に凝り

大阪市 中川 滋雀

原爆ドーム劫火映した川の青
俯瞰図のとおりに瀬戸の島霞む
敵島ブームの去った潮が満ち
責任の持てる顔なり皺を読み
身のほどを知る寄付帖は右同じ

泉佐野市 阿万 万的

第四回日展を見て

水音を描く大胆な絵の構図
月の色子供に希望の影つくる
岩魚焼く小屋本当の人間味
夕陽に染まる砂丘の色に明日があり
急行通過桜が散っただけの駅

松江市 中川 晃男

栄転の瞳にうるむ花霞
ゆびきりにちかった遠い春の夢
誘う手をすりぬけた少女 髪匂う
愛されぬわたしと決めて 夜の冷え
マンションにひとり住んで 女の意地

米子市 八木 千代

芯燃えるはなびらの地に朽ちてのち
挟まれて暮すパターンに馴らされる
交又せぬ道にも言葉諦らめず
埋れ火の青春名残りを気付かせず
追憶の女に濃い虹の色

三重県 川上 大輪

真つ白い生命を汚されまいとする
親バカを夫婦で笑い合う平和

体操競技(床運動)

曲線の交錯白い画布に舞う
伸びきった四肢青春の美を競う
スポーツと芸術その接点にある体操

新宮市 大矢十郎

動く歯をなだめる舌が知る余命
針と糸持てば中支がよみがえる
飲むと打つ飯場の雨に書く便り
記念写真また僕だけへピンボケル
せからしい男とむこうも思う道

倉敷市 野田素身郎

転動のどさくさゆっくり花見する
殺されもすまいが難儀なポストなり
思索まとまらず水虫かゆくなり
別れ話をどう切りだそう朧月
独酌へまだ雨足はおとろえず

倉敷市 小野克枝

商魂のときに火花となって散り
笑顔とは別なところに置く野心
背かない妻がドラマで泣いている
事なかれ主義に抗議をする若さ
温い言葉探している別れ

竹原市 森井菁居

木の芽あえつづけば春の詩に触れ
ミシン踏む妻に済まなく酔うて来る
うつろ抱く歩巾へ険し歩道橋
コンペアーに乗せられ野心失せてゆく
長男一才(二句)

ころんでも泣かぬ俸へ目を細め

羽曳野市 大峠可動

一直線に走って真実と並ぼうか
凡人のうた故郷が恋しそう
底辺の私に今日の道がある
人生のレール哀しい詩になる
凡人の足音つまずくまいとする

倉敷市 松下梁水

子の決意試めせば鞭のほうが折れ
因襲の壁に挑んでいる若さ
特価せんべい僕に似ている欠けている
ひと言の詫びで気が済む妻でよし
祖母他界

点滴へ生死を賭けている祈り

和歌山市 野村太茂津

沈思の座湿槩の軸に相對す
蹴られては路傍の石としての音
自叙伝を綴るに苦節は美しい
華の宴洩れたギツチヨの箸捌き
クラッチの操作に格調の高さ見る

藤井寺市 西

いわを

澗吟行

いつの日も造花に季節感はなく
突っかけて転んだことは秘めておこ

花ばかりでは花瓶さえ物足らず

耳打ちへ大抵首は縦に振る

足音が無い録音室で惚ける

愛媛県 村上旭童

暴落にしても密柑が捨てきれず

米作る事を忘れた人の群

そのうちに見にく筈の桜散る

春愁の想い五十の霧笛きく

一人釣る竿をぬらして霧流る

大東市 土岐トク子

独り居を揺る孤独に負けまいと

花びらは哀し踏まれて石畳

甘えてるパートに妬む女の目よ

同人と酌む酒は亡夫恋う疼く酒

母だけに聞いても欲しい優越感

東大阪市 竹中肖二

雨の日を選んで土地を下見する

花時の雨の予報がよう当る

笑えない仕打をピエロとなつて受け

十代のエレキギターに乗った唄

歓声と悲鳴ともどもジェットコスタ―

大阪市 川口弘生

雨男を連れて行ったに那智は晴

雨男へ一寸時雨れたジェット船

澗峽の松茸岩だけよく撮れて

御殿医と家老が先祖の車中談

お姫様の隣りの句座でつきにつき

大阪市 大坂形水

ドル増える狸の木の葉とも知らず

食い逃げをした儲け出る決算書

総武オーブン、最終のグリーン観る

一万ドルパットへギャラリー息をのむ

耳鳴りが聞こえパットの手が狂う

ベランダで喰べ用ほどはトマト生り

豊中市 橘高薫風

安からめ御身の胎児たり得れば

寂滅と遍路の果ての月見草

拷問や濤のすべてがわれに向く

昼顔へ届きたけれど波の舌

赤鼻の軒佳境に入りたり

大阪市 不二田一三夫

神さまの不公平 女だけ産ませ

いけばな展研を競うは衣裳展

小っぼけな舌だが大した演出家

寄席

高座もう末摘花で押しまくり

観客不在芸人貴族という高座

尼崎市 黒川 紫香

愚痴めいてその長生きを淋しがり

ひよこひよここと来て犬の仔帰らない

停年の肩に散る散る桜散る

日記帳きっちり埋めて所在なし

高槻市 若柳 潮花

泣いて済むひとなら遠に切れてます

爪弾きの老妓は売れた日を思い

雨だから歩く気になる御堂筋

舞踊会より

花吹雪女は鴛籠の垂れを上げ

門真市 福島 鉄児

はた眼にはじれつたいよな愛つづく

マイカーで今日も遅刻の判を押す

譲られる席へ辞退の腰のばす

愛遅々と進まず男にあるあせり

鳥取市 河村 日満

一と昔前の写真で母飾る

四季それぞれの花山盛りに一と七日

遠がすみ阿波の川々入り乱れ

洲本にて

朝陽島に映じ恩師の句が浮かび

大阪市 本多 柳志

末っ娘嫁く(二句)

一億の中の一人を娘は選び

掌の中の珠をなくした祝い酒

六法も嗜って妥協成り立たず

新宮吟行

民話から民話へ澗の水しぶき

高槻市 福田 丁路

開発を横目で土に嘔りつき

歐洲で遊ぶ相談持ち込まれ

惜しまれること無く定年退職す

弾の下潜った事を自慢する

下関市 石川 侃流洞

停年から人が変わったおだやかさ

灰皿も疲れ作家の朝となり

少し位いと血圧喜ばせ

儲け口大阪弁の勤のよさ

大阪市 木村 水洞

お膳立出来てるストにのってゆき

税務署に負けない本を備えつけ

退職をして一日の永さ知る

恋愛へひとり気をもむ女親

大阪市 福井 野迷路

まな板に鯉の眼想微動せず

脊のびして人生一着でゴールイン

くさめして命ある句を忘れとり

決戦に挑む無袖の空振り

笠岡市 木山遠二

和歌山市 垂井葵水

心配すなと腹が頭に云い聞かず
中寿とも下寿とも見えて古稀の春
美しと桜を仰ぐ禁酒かな
葉の出番心得顔に花が散る

姫路市 梅谿庵 不醉

下取りの査定もきかぬ歳となり
我が一生舗装もしない道で過ぎ
お帖場へノーシンノーシンと二日酔
蟹でさえ分相応の穴を掘り

大阪市 太田良子

へそくって見ても所詮は身につかず
酔うほどに飲んでもやっぱり云いそびれ
子には子の予定があつて日曜日
自然食と云う言葉が淋しすぎ

愛媛県 渡辺曉童

ひびわれた手が百姓の免許証
鳩すでに害鳥の部にあつかわれ
遊廓の説明をするもどかしさ
主観にすぎた校正のミス

守口市 村田瓢太

日溜りに乞食も並ぶ一心寺
春冷えに木の芽早すぎたかなと思ひ
制服を着る職業はいやがられ
生きている幸福今年も花を観る

気がついてからは機会に恵まれず
いい話待たせてお茶を入れに立ち
パンストを脱いでも歩巾変らない
にが笑いして傷心のノート閉ず

大阪市 児島与呂志

大胆になれば女の強い肌
本当の話へ言葉もついて来ず
もったいをつけてふたりの影を踏む
ふたりだけわかる話は目で伝え

堺市 河内天笑

太陽を捨てたところで稼ぐ身よ
ひとりの男が生れ変った旅がえり
いっぺん握らしてんかと札束へせまり
中年という燃えかたで口説いてる

富田林市 板尾岳人

ゆっくりと孤独へ登る山男
よく喋べる山へ無口が来て孤独
かくれ滝山の孤独を笑つてた
山男孤独を笑う滝見つけ

松江市 吉岡通児

東海道散策
五湖めぐり富士をひねもす見て飽かず
実朝の古事聞く銀杏風に鳴り
二重橋靴はほこりのまま撮られ

目のあたり事故見た旅の不倖せ

広島市 山田季賛

救急車僕の命を軽く乗せ

回診にペン持つ事も禁じられ

三日目のベッドで伸びる無精ヒゲ

付添えの妻昔話を語り出し

岡山県 大森 娛句楽

桜吹雪注ぐ句碑には済まぬ酒

菜種梅雨シトシトと降る木の芽醒め

摺れ違う顔が久しい声となり

石楠花の岩に盗堀避けて咲き

岩国市 弘津柳慶

薪で炊くめしのうまさも忘れ去り

プライドが許さず黙って席につき

麻雀を妻に教えて悔多し

引越のたびに火鉢は邪魔がられ

出雲市 原 独仙

ぼけましてなあーと老のミス見逃がされ

かあさんは隣保ニュースの解説者

露骨なお世辞と判っていて嬉し

老妻の彼岸詣りへ歩を合わせ

松江市 柳 楽鶴丸

父の笛に踊ってあげよう誕生日

学歴と云う立派な包装紙

勤続二十年変形した妻の指

男だけの飲みものでない大ジョッキ

大阪市 水谷竹荘

入院して

妻の持つ鍵にまかれて七十年

病んでから老いのショックを自戒する

シート白く白く窓には春が寄ってくる

凡人に添うて耐えたる妻いと

鳥取県 清水一保

義弟夫婦の交通死

焼香の煙の中で遺影笑み

知る者は神のみとなる事故現場

あの世まで手を取り合って悲しませ

花曇り花には罪のない政治

小松市 馬場魚山

借金でうずもれそうに得た新居

生き延びる事は孤独に堪えること

引越した家どこからか風がくる

長靴が横にもなって春近し

倉敷市 藤井春日

権力者腐った腫れ物にしか過ぎず

四月馬鹿それから二人に溝が

やかましい妻の留守居をかくし酒

人情に脆くお人好しだと云われ

大阪市 室谷徹舟

本心を見抜けなかった娘に詫びる

入園のカメラに眩し孫の顔
いらいらと不満をつめて通勤車
聞かれても私も地下街不案内

西宮市 島居百酒

故里の踊テレビで飲む飯場
空なりと仏は説けど業を持ち

那智、澗吟行

紀伊の巖映して澗の青く澄み
那智の澗半分いれて写し合い

守口市 羽原静歩

かおり幼稚園入園式祝吟

母と子のすみれ摘みつつ春の詩

松尾大社にて

老松の枯れても毅然夫婦たり

嵯峨野に

嵯峨野から宇多野を過る花曇り

文鳥の黙然として春の朝

大阪市 神谷凡九郎

若いのに夢さえないと吐き捨てる

悟られぬ日々で夢まで持てるんサ

満ち足りぬものありそこに明日が来る

馬鹿話しててふれてる胸の傷

岸和田市 福浦勝晴

長髪をするしか能のない男

過激派集団の真ッ赤なコンサート

大臣を貶して褒めて食べるソバ
人間があっさり一人死んでゆき

松江市 小林孤呂二

人生の難易へ酒と親しめり

人の智恵暮らしにくくしたを悔い

鎧戸をおろせば城下町くれがかり

長女京都府大へ

娘の自信父の自信を湧きたたす

大阪市 江城修史

逢うことの受話器をなぶる春の風

意のままになる半日は金がなし

残り火が未練がましく昂る日

愛果てた男の視野に花吹雪く

堺市 藤井一二三

毛糸針母となる日の夢を編み

テレビ料理家計に穴をあける味

郷愁の瞳に山はまだ緑

甥結婚

ドラマその俚に若さが遂げた恋

倉吉市 渡辺苦句

孫と逢う日の時刻表練っている

腹の子も欲しがってますとよく食べる

その人の貌みると歓喜仏に見える

指環はめさせていて能面でいる

大阪市 河井庸佑

昇進はしよせん噂であつただけ
人事異動噂はボクを課長にし
冷静になつて友情わかりかけ
逆境に立つて自分をためしてみ

倉吉市 奥谷弘朗

新課長ちと横柄な面構え
マイホーム済めばピカソの夢が湧き
抵抗を忘れた顔の小役人
大山を眺めて物価高忘れ

米子市 林瑞枝

あどけない指に婚約した光り
想い出の跡しみじみと掃いて拭き
ひとり娘巣立つ不孝を詫びる文
考える葦の孤独をいとおしむ

東大阪市 宮西弥生

そのひとの便り久しき雨つづき
忘却のひとまた恋しき雨の音
薬からはなれたコーヒの久し振り
山里の夜明けが早い川の音

生駒市 草深醉升

お転婆を白足袋おんならしくさせ
針金のように六十路を越えた脚
春うららうららと楽しバスの旅
よるめいて見たい今宵の月おぼろ

平田市 久家代仕男

寝不足の顔でダンプのノルマ主義

生ぬるい施策腹立つ日が続き
日稼ぎに無駄な紙面の株価欄
春耕の鋤生ぬるい風と居る

姫路市 大江秋月

单身赴任朝昼晩とカレー食う

二女結婚

肩の荷が下りて晩酌追加する
大阪で買うても当らぬたからくじ
欠伸するときも可愛い孫の口

岡山県 池田古心

結局は勝つ気の拳振り上げる
米価安い安いと泣いても米作る
自信過剰策ねり策に溺れける
趣味の話欠伸殺して聞く因果

今治市 越智一水

白髪とはかなし櫛には逆らわす
肩たたく妻にもあつたねだりもの
目をとじてみれば笑いがあふつと出る
天国がここにあつたよ花の下

大阪市 宮尾あいき

ジャスマミンに負けず勤労の汗匂う
ネオンに強く紫外線に弱い肌
土佐帰国
三日居た土佐の土産は焼けた顔
風邪の舌にタタキの珍味も苦いだけ

大阪市 河野君子

若葉にむせて中年の血が蘇り
浮草になりたや心沈む日々

息子と離れて二句

子の部屋の壁に私語が冷えてゆく
子の名刺へ夢の肩書き入れて見る

京都市 都倉求芽

念入りの化粧を朝陽に透かされる

ネオン塔屋の醜さ逞しさ

暗闇に甘さが逃げぬ程の風

ナツメロがそろそろ判る年齢になり

岡山市 川端柳子

何気なく咲いても花は愛される

人を斬ることも難なくペンの青

つまずいてともに笑えて泣ける人

引越して

当分はぐるぐる歩調の好奇心

泉大津市 村上春巳

指紋また前科重ねた夜が憎い

ルパンの空に望みの星も消え

本当の無駄は長生きしすぎてる

飛鳥路もさわがしくなり春となる

大阪市 飛田好一

ウイスキーバッグへ忘れぬ男旅

気の弱い男へ酒が味方する

新聞の朝も夕も人が死に

金のあるところへ銀行貸したが

松江市 恒松町紅

転勤へ老母を故郷へ残した荷

テープレコーダーで来る焼芋の流し声

新幹線駅の情緒もなく急ぎ

もう酒に小言いわない妻という

京都市 松川杜的

一輪の桜へ住職の話好き

道標の「中山道」へ近江路夕焼ける

常楽寺

満開の桜へ西寺ひた眠る

また春が来たなあー春のない勤め

広島県 高橋鬼焼

風船の穴から童話の詩がこぼれ

愛の糸つなぎ合せて一人ぼち

作業着のつかれをした洗濯機

春を着る小さな小さな妻の幸

宇部市 平田実男

別府旅行

高崎山猿が団体さん見下げ

妻と子と来れば別府もただの街

下っ端の車の車がデラックス

子との断絶へ残業拍車かけ

倉敷市 竹内翁童

採用通知当然の顔で受け取られ

ねむられぬ闇に妄想うずを巻き
役員が総出で迎えた新入社
人生のスペース無駄のあるゆとり

八尾市 飯田悦郎

結ぶ気で平行線を曲げて来る

ひっそりと立ってる地蔵に四季の詩

春風が胸に棲んでいる若さ

憎いから波紋立てたい石を蹴る

倉敷市 谷井扇水

弁解の足らずを母が瞳で詫びる

指切りの秘密は母にさえ云わず

電文は十七文字で足る讃辞

方言の素顔に戻る初帰省

笠岡市 松本忠三

上様でいいと領収書を貰い

マスコミの鼻狹犬に似て酷し

コブつきの散歩オンブしてダッコして

既制服身体のほうをもってゆき

尼崎市 高津徹也

ヨードルの流れるスイス春の夢

おおらかに富士万山をのざばりぬ

いにしえは伝記に頼る鯛雲

芽出ずる音に動揺もち直し

東大阪市 竹中綾女

孫と遊ぶ後の疲れはつい忘れ

孫嫁に戻してからの空虚感
マンモスの化石千万年の謎を解く
野仏にすみれ供えて飛鳥行く

東京都 増田次章

鶴見総持寺参禅会(三句)

ほの暗い壁にしみあり座禅堂

隣席の警策の音背筋伸び

一汁一菜血色の良い僧の巨軀

怒声出し又傷ついている自分

岸和田市 葛城伊三郎

見栄捨てた女生き抜く束ね髪

掛け軸へ一字も読めぬ顔が寄り

紐結ぶ手つき迄似る血の怖さ

働くに蟻一筋の道を着け

大阪市 本庄金三

三味の音客に汚職の影が見え

仕事振り賞められて居る新入社

週休がふえて前借りするレジヤ

お茶運ぶ通路に邪魔な客が立ち

大阪市 黒田真砂

肝心のところで女は意地をすて

鳥羽にて

漁火をはるかに鳥羽の夜の海

入江青く澄みて海辺は春の色

海苔筏絵のよう春の陽に霞む

松原市 玉置重人

春の色煩惱もぞもど動き出し
肥前炭老舗の味に焼く鰻

子を伸ばす寡婦の素顔の美しき

極楽を春の陽ざしに見た老母

大田市 藤田 軒太楼

酔うほどにお国自慢に尾ひれつき

酔うほどにうっぶん頭をもたげてき

酔うほどに奴鳴る軍歌に出る涙

酔うほどに本音ペラペラまくしたて

鳥取県 森田 布堂

急停車出来るゆとりは追い越され

車座の中でどうしようを掬いだし

新芽吹く木に枯れ葉しがみつ

旅の子を気使う夜の月仰ぐ

鳥取県 小砂 白汀

山均らすブルドーザーの孤影

見せられぬ泪でうごくのどぼとけ

回転の鈍さで丸く丸く生き

花喰うてなお醜さのつる虫

富田林市 木村 弥栄子

抱いている秘密に女みたされる

純白の汚れることにある悟り

禁断の木の実だからこそ陶醉し

一点へ疑い持たぬ人形の目

鳥取県 鈴木 村諷子

塔入れるカメラ仰向いて仰向いて
着た柄に見合うしぐさをおんなする

一瞬の静止もきかぬ青春の

こころとは違った色で書き上り

羽曳野市 塩満 敏

古稀の父(二句)

古稀の父お礼のあいさつ絶句する

子と孫が囲んだ祝いの老夫婦

借金をすれば病氣も寄りつかず

子供部屋ノックをせよと娘に云われ

富田林市 和田 維久子

祖父五十年忌(二句)

鶴の孫揃いましたと香煙る

お酒ですお肴ですよと墓碑の前

ひわ色の衣に夢のみのり待つ
緋衣に鞭打たれつつ土を握る

大阪府 西川 誓二

新薬師寺拝観(二句)

ひそと建つ新薬師に歴史染む

佗びたみ仏に天平のいき通う

蟻の貯えはインフレに浸されず
妻との対話に小さい欲のぞく

竹原市 時広 一路

愚痴言わぬ男は二歩と退らぬ
ヘルメット心の中も武装する

もの足りぬ日もあり明日を信じたい

秒針の一日やっど日が暮れる

堺市 伏見 茂美

低い寢息そつと夫にはほよせる

宿からの電話へ夫は酔うてはる

気が向けば来てねのマッチも出来心

幸をかみしめ今日もおしめ干す

八尾市 大路 美幸

花ありて酒あり鬼のうかれ詩

憎しみの酒にこまれる鬼ことば

迫りくる鬼あり遠き逃れ酒

石に寝る鬼の不覚や酔い深し

堺市 高橋 千万子

沖繩の旅(一句)

蛇皮線の過去沖繩にある波紋

ほり深く陽やけの顔が町を行く

つつぬける話へ口止め追っかける

日記帳去年のある日白紙なり

呉市 植田 英詩

私への愛と気付いた花言葉

好き嫌い花にもあって娘の勝気

愛枯れて花瓶の中に花がない

ブランコの足天を突き地にささり

樞原市 岩井 本蔭棒

女みな美人に見える日の自嘲

戦記読む時は二十の血に返えり

病棟のこんな隅にも世の縮図
球児いま涙のしみた土詰める

氷見市 関 美子

そんな目をしないで夫も子もあるわ

不発弾抱いておんなが母でいる

涙枯れて母は不死鳥紅を捨て

アジビラの悲劇こんな漁村の水溜り

島根県 谷 無閑

宝くじあたりゆっくり目をつむる

新緑の雨転寝に夢もなく

もらい風呂湯気のたたない湯につかり

七十を生きぬきまだまだ慾をもち
名古屋市 吉田 水車

大工が持てば活る金槌

自らを吊い鳴くか虫の声

京都方広寺大仏炎上

慈悲のかお無念の相に在わしまし

松江市 岡崎 祥月

慰めてなくさめ合って共に老い

天と地がさかさになってゆく時世

悪口を聞いても神の言葉とも

伊丹市 小川 静観堂

第八響

聴いてもわからぬなりにシューベルト

花の留守なんともみない幕の内

明治の一風景

担いで来た豆腐屋の水へ青空

八尾市 古川 鶴声

浮き浮きとして寝化粧に念を入れ

打ち解けて話せる仲間有る強み

落書の中で子供の才を見る

大阪市 今 西 章 雅

憎まれ口病気が云わすとおしめ交え

寝付いてから耳敏感になった叔母

看病も業だと妻をおこらせる

東大阪市 齊 藤 三十四

満開へ母子も並ぶ写生会

我が善意わかつてくれた日本晴

ツクネンと寛美の阿呆役がうけ

富田林市 浅 川 八 郎

奥和歌

親孝行素直に受けて奥和歌へ

海渺々かすめる島の小ささよ

空想をたくましくさせて丸い岩

兵庫県 河 原 みのる

広葉樹に酸素の恩を忘れかけ

見え難くさ眼鏡忘れてること忘れ

父 父たらずんば殺しても

中 島 英 子

ズク籠へ丸めたレターが気にかかり

女世帯釘うつ音も板につき

洋酒の名わからぬままに舐めてみる

諫早市 原 田 明 春

二次会の準備幹事の見せどころ

事件記者じんわり弱みへふれてくる

出まかせを喋って売るも陶器市

大阪市 神 田 秀 峰

他人の気どころか夫婦も危機一步

モーニング振袖今日は大安か

泉水の竹こだまする京静か

菊 沢 小松園

弥じろ兵衛褒めた子供の方へ倒け

掌へ一滴の血の物語り

飾り気の多い孔雀は先き疲れ

自惚れて上手な嘘に引っかかり

養魚池時間が来れば餌がくる

若 本 多久志

迷夢覚めきれず悟りに遠き古稀

取締役会長就任(二句)

職場から墓場は寂し職を退き

人生の最後 長の字つけてみる

時事吟(一句)

デスカバー交通ストも観せてくれ

ひき逃げをジッと見ていたお地藏さん

雑吟

北川 春 巢

死生一如七十の句詠点
ひがんだり力んでみたり齡だね
蔵王堂静を偲ぶか散りいそぎ

西尾 菜

割込みをする胡麻塩へ目をつむり
アベックかと思えば二人男なり
われながら完全癖に腹が立ち
暗算の下手な女房でまだつづき

内科学会 (京都)

南座へ行くほど会場費をとられ

川 村 好 郎

云い直すことためらいぬ妻にさえ
発車ベル再会遠き顔見せず

祝緑之助氏句碑建立(二句)
出雲路の神話の句碑に風薫る
之でええのと違いまっかと老妻が云う
チューリップチューリップと団地の窓並び
嘘に嘘重ねて嘘のままかえり
藁に色いれて椿の画となりぬ

近 詠

須坂市 高 峰 柳 児

無住寺を汚して鳩の住み心地
春の色花に負けない柄を選び
軒場から雀の恋がもつれ落ち

大洲市 米 沢 曉 明

夜桜へ恋みのりそう薄灯り
安くつく手近の司会者をたのみ
いさぎよさ桜吹雪に教えられ

今治市 月 原 宵 明

瀬戸の濃霧ドラマの中の人となる
耳に栓したい日があり独り酌ぐ

二女結婚

不束な娘を差上げ眼を押え

岐阜市 市 川 鱗 魚

峠茶屋生きてるようなトコロ天
小さい城その借金と言う励み
余生ちよこまかまだ人様の用ができ

東京都 池 口 吞 歩

生き恥を曝して今日の作句帖
作句帖己れへ鞭の音となり
夢のまた夢へ疲れる作句帖

今治市 長 野 文 庫

もし親が死ねばと息子当てにする
起ち上れない過保護の後遺症
心にもないこと言わず辞集

川傍柳 初篇研究

(百十九)

藤	清	岡	故	前
井	崎	崎	前	田
和	博	重	喜	喜
雄	美	義	代	人
岡	丸	高	故	川
田	十	須	啞	端
甫	府	啞	三	柳
		味		風

699 譬諭品の声豆蔵の中でする

用 司

川端||「譬諭品(ひゅぼん)」は妙法蓮華經第三の經文で、三界の光芒に譬え説いたものである。川柳大辞典には「浅草寺の境内」とある。「豆蔵」は寺社や大道で興行した下級な手品師で、一芸が終ると笹と扇を持ち歩いて、滑稽を云いながら見物人の投銭を乞うた。笹を空中に投げあげ徳利の口でうけたのが豆蔵の始めである。句意は、読経の声が境内にも聞こえるのだから、寺中で読経の声がする。

高須||「豆蔵の中でする」が、ちょっと判らぬ。この丁はじめからぬ句でうんざりする。「マメゾウ」でなく「マメグラ」ではないか。

岡崎||浅草寺境内で豆蔵が青空興行をしている。おりからはじまった寺中の読経の声

が、その豆蔵をとりまいた人輪の中から、聞こえてくるように聞こえる——との客観描写。

前田||豆蔵は川端・岡崎説の通り「マメゾウ」である。人輪の中からでなくて、寺から遠く聞こえてくるのではなからうか。豆蔵と譬諭品とを配しただけの句で川端・岡崎両説に賛。譬諭品の声が、豆蔵の興行の効果をあけているといったところ。

清||母袋未知庵氏が「川柳見世物考」に引用したが、「この句意未解」とされ、豆蔵の滑稽の像をいえるか、或いは見物がその妙技に拍手喝采するといえるか、と附記されているが、妙法蓮華經譬諭第三の經文冒頭から考えると、拍手喝采をするのではなく、豆蔵の妙技に見とれた見物人が、拍手喝采を忘れて、ただ感心している状態を詠んでいるのではなからうか。この「ウウ

ン」と感心する小さな声が、読経のように聞こえる、ともとれるのだが。

藤井||岡崎説に賛。「豆蔵の中でする」の描写がすっきりしないうらみはある。私は豆蔵が口の内で譬諭品となえるような調子で口上をいいながら、浅草寺境内で興行しているのだと思う。

丸||「豆蔵の中でする」がすっきりしない。謡曲東北に、和泉式部が門前を通る道長が車の中で譬諭品を誦誦するのを聞いた句として

車の中でニヤ／＼ムニヤと式部聞き 安四七五

という句がある。譬諭品のはじめはそんな風に聞こえるものであろう。と見て、主題句はやはり清説のように、豆蔵の妙技に見とれて、ニヤ／＼ムニヤに近い嘆声をあげている見物衆ではあるまいか。これを譬

喻品といったのは、豆蔵演技の場所——浅草寺境内——を示すためである。と駄芳解しておく。

岡田 豆蔵が豆を空に投げる時に擬声をかける、その擬声の音が堂内から聞こえてくる……でもいろいろのところが、譬喻品が妙法蓮華經とすると、日蓮宗の寺の境内ということになり、浅草観音ではないこととなる。この句はもう少し考える必要があるだろう。

700 無塩君呼んで身上立直し

一 甫
川端 無塩君(ぶえんくん)は中国唐時代の醜婦。みずから宜王の面前で国策を献じて容れられ、宜王の正后となった。斉国の無塩邑に生まれた人。中国の無塩君は国を助けたが、句の醜婦は暮の持参金嫁。その持参金に助けられて年の瀬をこしたという句。

孝行に持つ女房は年がたけ
富に当たった気でじゃもつ面を持ち傍二・9
高須 持参嫁の句だが「身上たてなおし」だから「暮の」を限定する必要なく、倒産寸前の身上を、それで救った——でよいのではないか。

無塩のお多福お目出度い先払い
岡崎 贊。

御為に相成候とてあばた 傍三・35
藤井 身上たて直しだから、大晦日に限定しないという高須説に賛。

丸 贊。暮の嫁と断定する必要はないが、礎稿のごとく無塩君は国を興し、この持参嫁は身代を立て直したと、対照した下心はくみとれる。

岡田 諸説に尽きる。

701 てう法な積を傾城持ている

一 甫
川端 積は癩の宛字。吉原の振られた客。きらいな客には癩だと断つてしまう、調法な病氣(仮病)をもらったものだ。

高須 女郎の仮病だが、女だけに「癩(しやく)とはうまい手である。時たつてケロリと直つたと云つても「しやく」では、とがめようもないわけである。

癩というやつで浅黄は損をする 五・24
岡崎 贊。

傾城の癩人を見ておこるなり 九・36
横っ腹おさへお許しなんし也 安八礼3

藤井 女郎には調法だが、客には癩の種である。

丸 しいやな客には癩、為めになる客には快癒まことに調法。

岡田 贊。ところでお医者さんの藤井先生におたずねしますが、昔は多かったこの癩という病氣、近頃とんと聞かぬが、原因は何ですか。やはり花柳病に関係あるんでしょうか。だれかに聞かれたとき、知らんというのも、それこそシヤカたにさわるから、そつと教えておいて下さい。
高須 主として「胃ケイレン」だが、まれ

には「子宮ケイレン」もあると聞く。藤井ドクトル、いかが。

藤井 癩は今はない」と岡田先生はおっしゃるが、癩と云ふ病氣がないのでしよう。今日の病理学的病名に対し、昔は病状名が多く、したがって色々な病氣が混在しています。癩とは突然に胃部辺におこる強烈な疼痛で、背部にまで疼痛が発散する点胃ケイレンと考えるのが最も適当でしょう。

「癩にうれしい男の力」と云つて芝居で苦しむお女中、前屈して苦もんの背中をぐつと押すシーンは、胃ケイレン時などに背柱の右側に圧痛点があるのに一致しています。その圧痛点を圧すと胃の痛みが一時うすらぐものです。文学的に云つて癩とは感受性の強い女の専門的病の点から、そのほかにヒステリーの発作も含まれていると思ひます。ヒステリーは子宮の意味から起因しているそうで、感情の激動で突然、疼痛、けいれんをおこし、周囲があわてればあわてる程に苦痛をオーバーに訴え、男子をビックリさせますが、生命には心配はなく、全く心因性のもので、川柳に於て痛と同様、女性専用の癩は「けいれんプラス、ヒステリー」と考えたら納得できると思ひます。高須さんの子宮ケイレンをヒステリーと訂正すれば充分でしょう。昔はそう思つたのでしょうか。

橋高薫風さんが、お母さまとおふたりで、四国遍路のバスツアーをされたというニュースをきいて、私は内心、羨望にたえなかつた。私の晩年の悲願は、四国八十八カ所をひとりでコツコツと歩いて回ること、この夢をあためはじめてもう一むかしにもなる。

私の郷里は本誌同人の小川静観堂さんと同じ伊予の大洲である。幼児白いすげ笠姿のおへんろさんがチリンチリンと鈴を鳴らして菜の花や、青麦の畑の向うをのんびりと通り過ぎていくのをあけくれの春によくみかけて育った私である。屈託ないそのすげとすげ笠の点景の一コマずつが、よく暗く冷たい大陸のひとり暮しの底で眼にうかべ、これある故のふるさとかなの実感をたしかめつづけたものである。

この三月、姪の結婚式で帰郷した際、図らずも死んだとばかり信じ込んでいた同郷の戦友に再会した。まさに三十年近い歳月が経っている。私と同じ白鬼の形相も哀れに、ポツリと彼はこうつぶやいたものだ。

「来年の春は、八十八カ所めぐりをやる。これは多年のおれの夢なんだ。なぜ、その急ぐといたいだらう？ おれは大陸の戦線、二人の中国人の兵隊を殺しているんだ。白兵戦での成り行きながら、その二人の貌が年を経るほどヤケにハッキリと、その二人の眼の前に出てきてねえ、往生してるんだよ」

幸い私にはそんなイヤな記憶はない。そのかわり、大陸のあの鄭州の近くに埋めた、私の切断了腕がしきりに、私の眼の底にうか

び上って仕様がなないのである。白く霜を刷いた白蠟のような私の片腕は、燃えたつ花のよなアカシアの若葉の下穴に他の肉片たちと連れられて降りつたのである。空っぽの和服の片袖を吹く風は、五月の青空の下というのに、あの穴底の空間を埋めたその風のように今もわびしく秋風のごとくある。生来三十余年、文字通り私の何物にもかえ難い片身への思慕は六十近い歳月にたどりついたら、ま、しきりと恋しく懐しくて想い出されて仕方がないのである。これは誰がなんといおうと、当の私にしかわからない心境なのである。四国八十八カ所の札所のうち、伊予は四〇番から六十五番までがある。つまり南予の果ての平城山観自在寺の四〇番から、川之江の由霊山三角寺で終るわけ、そこが六十五番目。あと香川県の讃岐路に入るのである。第四十三番は源光山明石寺で、宇和町にあり、つぎの第四十四番は久万町にある。この間は遠い。旧へんろ路をたどる近路でも六十二キロ、乗物の走る道をたどれば九十五キロもある。ちょうどそのつなぎに十夜ヶ橋というのがある。これが私の郷里大洲市郊外にある。字は徳の森。むかしは旧大洲町の外れから約

般若とお多福

東野大八

一里、桑畑やネギ畑の人家の一軒もない畑のただ中であつた。数本の大樹に粗末ながら木造の大きな集会場が一つが建つていた。そしてそのかた木造の一宇の社堂然とした祠と、くたぶれた木造の短い橋があつた。

弘仁のむかし、弘法大師がこの地方を巡錫され、このあたりにきて日が暮れた。だが乞食坊主さながらの風態とて誰一人宿を借すものもない。仕方なく土橋の下の河原で一夜を明かされたが、冬とて寒気きびしく一夜が十夜にもまさる思いですごされた。

行き悩む浮世の人を渡さずは

一夜も十夜の橋と思はゆ

このお歌により十夜ヶ橋とよばれるようになった。しかし、ここは札所の番外である。

私の小学校時代、遠足の昼食場によくここがあてられ、食後に先生から必ずこの話をきかされた。子供ころにもあまりくどいことなので、この辺の住民はみんな薄情な人たちばかりですね、と一人の訓導にイヤ味をいったら、薄情だったから有名になったんだ、とその先生が答えた。のちになってこの先生なかなかイカスお人柄だったと思つたようになり、戦後気がついたらこの人、社会党の国会

議員になつていた。

ここの石像は寝姿のお大師さまがかたどつてある。ふとんがいつもきせかけてあつてそれがいつも新しくなる。古いふとんは集めて打ち直し、傍らのへんろ宿の夜具になるわけだ。老いたる私はそこに寝たい。

戦後、隻手の引揚者で帰国し、寺の位碑堂に住んでいたころ、住職が県仏連の役員だったのでよくお伴をして、各寺で般若湯とおときにあつて、食糧難の折とて大層有難がた。私のいた寺の宗会には五十余人の坊さんが集り、寺の多いのを再認識した。この道中で、私はいつか各寺の御本尊さまの、尊容に興味をもつた。俗世の人間同様、ホトケの

猫への土産

光武 弦太朗(彦岐)

菩提樹下 悟りは乳のひとしずく
芳草に臥て思春期の雲淡し
大根のこぼれ花咲く小島之路
水仙のそばにみだらな落椿
酒盗む素足にしみる夜の冷え
保険金忘れたるに満期来る
予告篇さわりを見せて気を持たせ
菰包みてきばき作る運送屋
頭だけ下げておきなと叔父の智恵
帰路に摘む猫への土産ねこじやらし

顔も千差万別であつた。

松久朋琳という仏師がまとめた「京仏師六十年」という近刊本にこう書いてある。この人、京都に生れ十歳のとき養子に出た先が御仏師(おんぶし)。十二歳になつてはじめて福助を彫つて、注文主から三十銭貰つた。先年、五十年ぶりにその福助と対面。

「とたんにアツ、わしじゃ。わしそっくりやおまへんか。これにはびっくりしました。いままで彫ってきた仁王さんも観音さまも弁天さんもみんな私でんねん。こなし話して私さんもみんないの汚れた私。しかも、無私となつて彫ってだけの私。だれも私性、無私。人間、だれも仏ごころを持つとりません、私。このことがほんまにわかつてきましたんや」

「い」仏を彫る「あるいは仏を造る」という言葉が使われていますが、あれは仮の表現であつて、わたしら仏師は、本当は「仏を迎える」「あるいは仏に出合う」「ついでにするんです。つまり私は初めから木の中にまかして余計な木屑を払いのけていたらよろしい。そこが一般の彫刻と仏像彫との根本的な違いといえますよ」

「七十二歳のこんにちまで、小さな念持仏から大阪四天王寺の仁王さんのような大きなもので、三千体以上の仏像をつくつたが、その一つ一つは御仏と語り合つて生れたもので、世の芸術家のように「個性の表現」などと誇りがまじゅういえるものは一つもない」いまこの人の工房に娘さんや小学生がやつ

てきて自由に仏像を刻んでいる。

「私、そんな人たちにいますねーあんなさんがたの心の中にあるホトケさんを現わしなさい、それだけや」とな」

私は淡々と語るこの人の仏性の手にとり方に感銘した。この本に書くからいうのではないが、これは川柳作句の場合にもあてはまるのではないだろうか、と。心構えと精進次第では平凡な作句の底にもホトケが現れ、人の賛仰を得る場合もありうるのだと……

相模原の旧陸軍病院に、終戦直後私は三ヵ月を過した。二千人からの切断患者の中に、傷病兵の職業訓練の一むねの家具部で、懸命に般若の面を隻手の左手でノミをふるっている男がいた。きけば彼は欄間づくりの職人だが、左利きの甚五郎ではない。世に出た渡世を従前の職で食っていくには、残された不器用な方の左手一本が頼りなのだ。

ある日、一人の老兵がこう彼にいつているのに行きあつた。年輩のその小男は言った。「なぜ般若など、怒り貌を彫る？ 氣持が般若さながらだからさうしたのかも知れんがホトケの道の般若は智恵のことだ。これはその般若じゃないタダの鬼だ。なぜ福助を彫らんのだ、なぜ笑つたお多福を彫らんのだ」

京の仏師の三十銭の福助のくだりで右のことを思い記した次第だが、とにかく私は、八十八九所めぐりにホトケの貌をみたいのが実は本願でもある。そのためにもパスツァーではそれがみえないのではないかと懸念するわけである。

写生句について

戸田古方

「ひよつくりと椿みつけた道成寺」
「ひよつくりと椿みつけし道成寺」
黒点をつけた「た」と「し」がちがうだけ

である。「た」の方は川柳塔五五一号の多久志氏選の川柳塔の句、「し」の方は同時に入手した俳誌山茶花第二十八巻四号の下村非文氏選の句である。

私は今年の節分の夜を南紀下津港で過し、翌日田辺石神梅林に一目三十万本という素晴らしい梅を見て、帰りに、日暮れ近くになって、道成寺に立寄った時に得た句である。

結婚したら、こんな親孝行も致し兼ねると二男が車で連れていってくれた。道成寺は私共夫婦は何べんか来ているが、俵ははじめてだというので寄ってみる気になった。

五時も過ぎていたので、有名なおもしろい縁起話を俵に聞かせることはできなかったが下向しようとした時、それこそひよつくり赤い椿のひよつくり咲いているのを見つけた。

髪長姫の伝記といい、安珍清姫の話といい女にまつわるこの道成寺と赤い椿の花の組合せが、うまくいったからでもあろう。柳誌、

俳誌、同時にこの句をとり上げてもらえたのは嬉しかった。

柳俳の差というか、川柳の限界、川柳の正しい定義づけがしたい、柳人古方は本当の川柳とは何かを知るために、こうした実験を時々繰返している。だから、二月号に投句してから、この四月号の出るのがいつも以上に待遠しかった。一句でも両方に同じ句想のものが取上げられたらなあと思いつつ続けた。

さて、今回の両句だが、二つでなく一つである。俳句は文語、川柳は口語という掟に従っただけである。これを持ち出し、しかも丁寧に二句並べたのは、机の上や頭で作った句ではなく、今回は真正正銘、獲れ獲れの吟行の句だったからである。

詩心の動いた通り技巧抜きでそのまま句にした。佳句かどうかは別として、こうしたブツケ本番の句作は川柳の写生句としてはいささか安易に過ぎたと思っている。

小暗い茂みに赤い椿を見つけただけであれ。こんなのはむしろ俳句的発想かもしれぬ。

何か誇らしいものはあるにはあるだろうが、それなのに川柳にまで取上げてもらえたのは椿の一輪を口にくわえて、情熱的に踊り狂うカルメンとはいささかオーバードだが、それに近いものを女性に縁の深い道成寺という地名から感じとられたからかもしれない。

正直に言って、この句を得たとき、少くとも帳に書きつけた時にはそこまで考えてはいなかった。道成寺の句がやれやれできた位のところであった。女性と椿と道成寺とこんな都合のいい結びつけ方をしたのは活字になった句を見てから勝手に理屈をつけたまでである。

俳句でも固有名詞を入れる時は、その固有名詞が余程よくうまく生きていなければいけないといわれる。

「菜の花の黄がアクセサリーになる明日香」
「明日香」がさっぱり利いていませんなあといわれた。それに比べるとこの句の道成寺はいささか生きていくのかとも思う。

この行で得た句で、多久志さんの目にとまったものに

「法楽焼うっかり塩を口に入れ」

「男の買うみかんちっとも安くなし」

などあったが、これでは俳人っぽくはない。俳句の句座で、人事句を見かける

ことは最近多くなったようだ。俳人、俳歴の長い俳人にいわせると、自然を写生すること花鳥諷詠に通じることである。その姿勢を崩さずに、人事を詠い上げるのは容易でないという言葉もきく。

私は俳人になる意志はない。平気で柳人として人事を詠んでくるので、全没も珍らしくはない。どれだけ網にかかるか実験である。ゴーイング・マイ・ウェイで横行闊歩している。季語という厄介者があるので、それまで無視している訳でもない。

柳川の写生は、直観で捉えたものを卒直に詠むというよりは、それを分析し、再編せねばならぬ。その心に入り込もうというのだ。チョッコラチョイでは句にならない。

直観で琴線に触れたら触れたで句帳に書き留めるのはよい。だが、句がまだできたとはいえない。これから産みの悩みがはじまるのである。

折れたかと思へば起きる筏さし〃

餌だけで

高 鷲 亜 鈍

餌だけで生きている日の空しさ
年の暮不易流行理髪店
見下ろして初日を拝む高層族
戦争も平和もいのちを的の氏子達
神人とともにあり人神とともにある
外は雪パンにコーヒを熱くして
句を捨てて久し朝のパンを焼く
黙秘権なせに殺人犯へ追い込んだ
表そうじ一階だけを掃いておく

〃押へれば芒はなせばきり〃
古川柳の写生句として有名なもので、誰でもよく知っている句である。先人が作りっぱなしに詠み上げたものか、あるいは永い時間をかけたものか、知る由もない。

だが、柳人であるわれわれが、毎日作っている句は写生でないかといえ、ことごとくとはいかないまでも、目の前で見ているか過去の経験かとはかく日常の体験の写生にちがいない。ただ俳句のように花鳥諷詠や自然諷詠でないだ、われわれは人生そのものじかにぶつかって写生している。柳人が俳人に近い句を作るのは自然との出合いが強調された時の作句にすぎない。

俳人だって毎日身辺の自然を見ているのだ

老友の身をいたわりあって負けず酔う
卒中の前科忘れて会えば酒

おまえおれどちらが先に馳けつくか

赤軍とか機動隊とか狂った血

糸に操つられて狂わせるものがある

チャンネルをひねりまわしてニュースの追跡

結構なお身分疳癩治らない

純粋か直な気持で肚が立ち

凡骨をひきずりながら生きている

炎 頭にのぼり眼から噴き出る

叩きのめされ土を掻き走る

古稀がそんなにうれしいか

老醜を晒けだして恥を掻く気が

公害の元凶こそは資本主義

なぜになぜに安保斗争なせ守る

が、見慣れて、倦いてきて、刺激されなくなるのか、吟行という少し変わった自然を求めたがるわけである。

柳人にとって、作句意欲の湧くのは、平穩無事の日よりも、喜怒哀楽がドキッときたときである。目茶苦茶に肚が立った時や、不平不満が高じた時、思いもかけぬ句が生れる。柳人の写生はそれではないかと思えてもくる。

写生の精神は対称を正しく、確りと見つめるということに少しの変りもない。うちにおっても、出掛けていっても、それさえ心得て忘れなければ、随時随所、立派な写生句が生れるものと信ずる。

反共の革命思想古典めき
純粋はいのちを棄てることでない

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所
会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3451-14

夜間 04 44 08

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

酒瓶の中に勇気が詰めてある

小浜 牧人

これは悲しい勇氣である。人によって瓶の中には涙が揺れていたり、笑いが転がっていたりもするであろう。

福耳で遠い雪崩れを聞く地蔵

香川 酔々

野末にたつ石仏の表情と春の間近い陽射と遠山の雪の清々しさが福耳に凝集されている。地蔵と名詞止めにしたことが、句のムードを弱めている気がする。

好きな人探せと親もさじを投げ

福島 鉄児

いくらお見合をしても気に入らない自己過信型、親の言葉に乗ってゆくことが何か古めかしいでも思っている時代錯誤型。さじを投げたと云っても、投げつばなしに出来ないのが親というものであろう。

冬眠を起した蛙埋めてやり

黒川 紫香

子供等は蛙の腹をうれしがり。初期時代の句主の作品である。近頃は余り見ないが虫の句ともなれば氏の独壇場。下五埋めてやりを「やる」とした場合の句の落着き具合を考へてみた。

嫁つた娘の声がしそうな日暮れどき

堀江 正朗

句主の家では娘さんが不断は聞いていた草履が、まだそのままに置いてあると聞いた。娘を手放した父親の淋しさは、母親の気持とはまた別のものである。

夢で会う亡夫はあっちむいたまま

宮尾 あいき

うしろを向いた肉身の夢が、どういう意味を持つのか分らないが、この句、やりきれない程の淋しさを投げかけてくる。

片目の達磨いつも心の隅に抱く

小出 智子

片目のだるまよ、心の隅、思わずやられたと感じさせる巧さである。

遠い道ぐんぐん駆けた日を思い

河股 緑水

青春の汗は透きとおった緑の色である。

じうたんのよこれへ春はもうそこに

高橋 千房子

冬の間は眼にもつかなかった汚れが、走り

寄ってくる春の明るさのなかでは妙に気になる。適確な把握がうれしい。

「夫婦善哉」でも蝶々後家になり

不二田 一三夫

「でも」がビタリと利いているのが何かとても悲しい。夫婦の絆などを越えて本当に雄さんを自分の分身のように愛していた蝶々さんであろう。

飲める人には飲んでもらった一周忌

野田 素身郎

保育所のピアノも春を弾いている

小林 孤呂二

ともに明るい雰囲気心が心にひびく。

孫かえし鏡台へ女としてのパフ

林 瑞枝

おんながオバアチャンから女にかえる時、若くして孫を持った女性の楽しさである。

寂しおす気休めばかり聞かされて

浅川 八郎

病いの床にある句主にとって切実な心の叫びであろう。

バスガイド帰路は無口になって坐す

竹中 綾女

奥琵琶湖の前書がある。往路は沿道の名所や歴史さては歌など、サービスにこれ務めてくれるが賤ガ岳を過ぎ彦根を過ぎると、種切れになり客の方も疲れてくる。実感である。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

ぶじ暮れて夫婦茶碗の丸さかな

堀江芳子

これは若い夫婦にも年寄りの夫婦にも共通する句であるが年寄り夫婦の方に考えるのがずっと味わいが出てくるような気がする。何事もなく暮れた一日、お互を意識しながらいったりわたり合つて過ぎた夕食である。夫婦茶碗の丸さに感謝の手を合わせたい気持である。

老人の眼に老人がよく目立ち

堀口欣一

老人人口がふえて来たせいかもしれないがこの句は共感の持てる句である。電車に乗つても街を歩いてても実にそのとおりで自分の年令を頭に入れてあの老人は何才くらいであろうかと考えることしばしばある。自分より年をとっている人、自分より若いと思われる人それぞれ顔の艶や頭髮の薄さなどにいろいろの

思いをはせて見ることが愉快である。

シャンペンの音よるこびへ飛び上り

神原秀子

よるこび事に抜かれるシャンペンの音は一座の空気を湧かすのにもって来いの音である。誰が考えてこんな酒を作ったのかしらぬが次々と栓が抜かれシャンペンがほとほとしり出てグラスのふれ合う音の中で祝宴のムードは次第次第に盛り上つてゆくのである。

喪服きているを忘れたしやべりよう

小山内貞男

つつましく神妙な顔をしていなければならぬ喪服は悲しみに打ちひしがれている家人を他所にしてよくしやべる喪服が目につくことがよくある。久しく会わなかった仲が葬儀という行事によつて会つたせいかもしれないが死んだ者は死んだものとして案外割り切つた気持になつていのかそんな性分の持主同士であろう。けれどもあまり体裁のよいものではない。

燃える気がまだありエンジンの服を着る

松本市郎

大体このごろの服装は年をとるほど派手になりつつある事実を認めるが心の中は派手に出てくるものだ。まだ燃える気があるのは男も女も同じことで情熱を服の色に見せて老いてますます盛んなのはまことに結構な次第であ

る。

おちてなお櫓おんなの彩で炎え

嘉数千代香

櫓の色をおんなの彩とずばり言つてのけたに感心をさせられた。昔から女と赤とは切つても切れぬ間柄とされて来たもの、落椿の赤さに女の彩を見出したのはやはり女性の感じが漂っている。女性の中にも男性の中でも落椿の赤さを女の色に感じる人はそうざらにいたとは思われない。着想の鋭さそして女性独特の観察眼に敬意を払いたい。

晴れ姿父の涙を見せまい

大林曲ん手

深刻な句である。花嫁姿の花嫁の眼と涙を流している父の眼とがふれ合つたそのひと時は人生に一度しかない一瞬である。二十年余いつくしみ育てて来たわが娘が立派に生長して嫁いでゆくのはほんとうはお目出度いのであるがこれを手離す段になると淋しさがこみ上げて来るのが両親であるがこの句の父の涙が光っている。

山村祐集私版 短詩型文学全書

一行の詩 地に塔のことし 一行詩篇第一集

「短詩」の主筆者として著名(二百円送料共)発行所—東京都文京区本駒込三一四—一〇 八幡船社



北川 春 巢 選

大阪市 阪上 十止庵

人形になってもこどもだけは産み
ふりかえるむかしはミルク色の霧
俺もついに飾り鉦という顧問
舌うちの癖 幸せのうすい女
にぎりしめた拳を今日が抜けていく
リハーサルのない人生を寝ておれず

大阪市 白井 孝子

直線をまだ近道と他人は言う
ポリニウムを上げて一人の城に居る
このベンチ明けてほしそに行くカメラ
女 母 今日ほどの面つけようか
ひまな人と思われサウナ風呂

島根県 堀江 芳子

見えぬのになが花見ぞ独りごと
方言になって心が歩み寄り
サロンパス笑った頃が懐しい
厄落した気であきらめる財布

酔えばすぐ眠るあなたが命綱

島根県 柳原 秀子

閉された心へきかす花だより
貧しさへせめて多彩な花咲かす
燃えるものなくして唾となる夫婦
潮時を逃して遅い青春となり
母となる立場となって母を恋い

大阪市 堀口 欣一

末世の親鸞生誕八百年
気分屋で通し還暦すでに過ぎ
この家も親子二代の天邪鬼
角刈の三男坊がよく稼ぎ
女好きらしい額が禿げ上り

和歌山市 原 庄 治

命まで担保になっているロイン
酒の量妻は多めに愚痴を云い
小切手に慣れてキャッシュの嵩こわい
老いてなお子を従わす金握り

ほほえみを返してくれたエトランゼ

大和郡山市 森田 カズエ

車買うてそれから遅刻多くなり

写真うつり賞めすぎてから気がとがめ

婚約の胸にひろがる青写真

アパートの二人だけなら貸すと云う

金さんがもう脱ぐころと母を呼び

大阪市 新川 貞祐

松葉蟹寒をもてなす色の冴え

春うらら孫が彼女を見せに来た

生涯にナイスショットは出ずじまい

新居に年輪のあかし古い家具

哀しき習性余生送るに分単位

鳥取市 両川 洋々

古傷がいつそ無口にしてしま

捨てぜりふ吐いて敷居にけつまずき

欺いて影に脅える日がつづき

銀婚も近し黙っていて通じ

生き甲斐にされて過保護の子に育ち

東京都 山根 白星

政治家に夜な夜な打たん呪咀の釘

この人も出世に遠いコップ酒

回精の秘法を眉唾とは思

おでん屋の女将と射程距離にある

今治市 渡辺 伊津志

休日の花の匂いに身を浸し

すぐ眠る特技があった人気もの

貯めている自信が噂近寄せず

反応が強く冗談ともいえず

竹原市 三宅 不朽

菜の花のむこうに夫婦の幾山河

献灯の後姿のみな素直

翳をもつ日よ似た人の多いこと

嫩の柄のここに亡父がしかと打つ

岡山県 嘉数 千代香

姿見へ今日のいくさをととのえる

倅せが降って来そうな空の碧

負けて勝つことも覚えたおんな坂

怒っても泣いても墓場につづく道

和歌山市 秋月 宏方

日本に大安というめでたい日

丹前に変身をしてマイホーム

金出せば話わかるとおだてられ

ドック入部品のゆるみ見て貰

守口市 岸本 豊平次

新幹線はやる心に追っつかず

代読の弔辞乾いた眼のまま

貸農園三坪が不満苗売場

まな坂の鯉をほめつつでばを磨

岡山県 武元 柳子

結婚に帰省する子に花吹雪

下車駅の車内放送花の駅

いささかの酒に悔あり春を病む

貰いてのつかぬ子猫が日々育ち

和歌山市

樫村 ふみよ

事なかれ主義をまわりがはがゆがり

ぼろくそに言うてて留守を淋しがり

じっくりと鏡楽しんでる若さ

明眸も老眼鏡のクラス会

河内長野市

井上 喜 酔

春雨へ桜は生命惜しげなく

公害の日本で不思議に寿命延び

ご無沙汰をしたら故郷垢抜けし

無駄使いしてたら終電乗り遅れ

愛媛県

小山 悠 泉

歯の抜けた夢 だあまって膳につき

公害と間違えられた花曇り

アライン黒い涙が流れそう

生甲斐はせつせと送る子の学資

今治市

渡 辺 南 奉

まだ早い宵を眠らず花疲れ

敗北者にはなるまいぞ金をため

三十を過ぎた野心も悔もなし

叱られた日も月給にかわりなし

新潟県

高 野 不 二

買い占めて税も取られぬ工夫する

定年の友へ

人生の附録まだまだ働く気

大臣の腕を見くびる物価高

駐車場で喰って壇家をあてにせず

岸和田市

池 田 香 珠 夫

商魂も露わに駅のお花展

簡単に合鍵できる世に怖れ

家はまだ買えずせめても墓地を買う

カタカナにひらがなのルビ振る絵本

三重県

川 上 富 子

ぎこちないあやしへかろうじて笑い

物干しへまだ落ち着かぬベビー服

瞳に涙貯めて乳房を恋しがり

ベビーベッド小さな部屋を支配する

大阪市

小 谷 葉 子

逆ろうているのも女恋のうち

カプセルに詰める記憶が多すぎて

ウオッカで乾杯奇跡を待っている

部屋中が楽譜となつてマイホーム

大阪市

柳 原 静 香

新宮への旅(一句)

脱都会脱主婦母の旅プラン

姉の服借りて娘の恋たのし

春は憂し心に泌みる雨が降る

東大阪市 坂東若芽

頼もしさふり向かず行くランドセル
貫録がおありと太り過ぎをほめ
噴水のささやき春着ほしくなり

樞原市 西本保夫

知りすぎても困る実情平社員

毒舌へあたり見廻す平社員

冷や飯はもう喰いあきた平社員

備前市 武内雅堂

夜桜へ誘い男を奪いけり

うぬぼれているうち春は通り過ぎ

人妻の瞳が濡れて恐くなり

氷見市 有磯涙月

公害を無視した儲け論ばかり

騒ぎ屋が手ぐすね引いて待つ順法

切れ過ぎる腕へ買手のない皮肉

大東市 土井浩輔

選曆を過ぎ逆むけの絶えぬ指

筆買うて書道ブームに乗る気なり

靴下で臍までかくしミニを穿く

大阪市 小谷清女

打ち込める仕事を持って嫁きおくれ

お気に召すように私を変えてみよう

入学金安い息子に礼を言い

鳥取県 大坪天涯

ひとり言言うて悔しさからのがれ
手についた趣味に寸暇を労わられ
友情は手酷く批判して帰り

鳥取県 林露杖

日展観覧(一句)

ブロンズの裸婦の眸に見据えられ

久松山の花を見る(二句)

九分咲きの花に椿の紅哀れ

松籟は落花の宴待つ音色

鳥根県 桐みどり

白無垢で貴男まかせに染まる式

母の味身につけさせて嫁がせる

よもぎつむ母娘の歩巾も春らしく

松山市 谷のぶお

妻の留守花の盛りを見ずにする

集金の果報は花の下通る

孫の顔見に行く妻にほっとかれ

大阪市 平井露芳

物価高大根代表して名乗り

鳥取砂丘

風紋の诗情みぞれにかき消され

三朝温泉

川音を枕に雪の夜の早寝

今治市 大本バット

帰る家有るから出来る梯子酒

素直には自業自得と割り切れず
護る子も無い生き甲斐に金を溜め

今治市 伊藤 一郎

母と妻意見が合うて露の臺

お任せが出来ぬ凡夫で四苦八苦
下手くそな唄で座が持つ花の下

尼崎市 中谷 利美

と金とも知らず肩書ふり回し

女房へ意地でも休めぬ二日酔い
親の恥子が見せつけている車内

東大阪市 落合 思月

君と僕途中下車のきかぬ酒

小っぱけな庭念願の鶏を飼い
子の躰けなどは知らない若いママ

弘前市 小山内 貞男

手際よく母はおしめの匂いかぎ

良し悪しのわかる心を育てしに
貯金する借金のためとは哀れ

貝塚市 行天 千代

注射して薬も持って春の旅

白髪染め六十路過ぎてても女なる
入園式へママの仕度にひまがいり

今治市 今井 松花

映画観て帰って聖書読み直し
来客をケージの鶏が騒ぎ立て

柄よりは値でネクタイを選んで買ひ

守口市 野呂 杜月

澄んだ夜は殊更月を孤独にし

充電が出来たか むっくりしゃんと起き
身を削り食うようピフテキ値段表

竹原市 古江 雅鳳

妻のあやつる人形になり切れず

プリズムの色も狂った恋となり
冷え切った駅に微笑の女と逢ひ

大洲市 堀内 曉風

さすが名取り下手に合わして呉れる三味

頼りない自信過剰について来ず
人の渦ふまれた足でふみ返し

鳥取市 有田 鹿の子

古い服出して花見を派手に着る

思い出がある春雨が美しい
孝行のつもり留守番かって出る

米子市 福島 城山

せせらぎは詩人で春の詩を詠む

日々灰色に暮れて明日なき後遺症
お師匠さまと慕われ婚期いつか過ぎ

岡山市 船越 洋之

わりかんのお好み焼きを吹いて食う

石ひとつ投げて少女は甦える
つけ臆恋を始めて重くなる

出世コース汚職の罨にひっかかり
指輪はめるだけの指で退屈し
定年退職六〇%になら下がり

仙台市 川村 映輝

ビルの谷間日当る個所の昼休み
憤然と立ったが亭主鉢を踏み
路郎先生の遺志愈々発展す

大阪市 松をか 右 次

二階おりて街路潤歩す川柳塔

日田市 吉田 五福

欺されて喜んでいる四月馬鹿
電話まで掛けてわざわざ四月馬鹿
下戸だけが端然と座し花の宴

和歌山県 ふきあげ 虎城

純情でいたい日 花へ子と連れて
おんなひとり鏡に紅で描くハート
宿縁として大伯父の愚痴をきく

東京都 宮崎 美津子

お彼岸さん揃えた家族の頭数
御両家の味と灯分けて新カッパル
勝算はなくてもできない回れ右

高槻市 山田 スミ子

海の青満員車窓なぐさめる
玉葱の新芽が明日を信じさせ

河内長野市 森 本 黒天子

黙りいて意地張り合って老夫婦
申し合せたように寝過す老夫婦

岩国市 村井 西合

これからもひとりで耐える四十肩
虹消えぬいまが倅せかも知れず

寝屋川市 井上 武松

四国高知方面の旅にて

南風に竜馬の像は生きつづけ
初節句2DKにも鯉泳ぐ

寝屋川市 福富 隆子

買占めがひびき包布につき当てる
孫を見に行くに牛肉寿司をさげ

大阪府 藤田 頂留子

人哀し輪廻買占め売り惜み
一円貨見なおされてるコインブーム

名古屋府 大林 曲ん手

申訳けないがと後日の判を取り
むつつりの夫の分まで喋って来

島根県 岩田 三和

見ておくれ名画のなかに嫁が鳥
柳かけご飯でけさも日本人

大阪府 河原林 比呂路

腹案を胸にしかとピエロ来る
窓あけて今日も倅せ来てもらい

豊橋市 鎮浪 翠月

倅せは夫にすがる胸がある
散髪屋二人がかりで泣きやまず

羽咋市 三宅ろ亭

あら不思議おれに似た孫又一人
もの言わぬ相手脈の引き難し

鳥取市 大塚豊生

ステレオの針取り替えて明日へ賭け
寄せ書を持って見舞いし別れなり

宿毛市 山本窓花

平凡な幸せ一本つけて待ち
山の幸食べに来てねと赴任する

今治市 真山国彦

急行はホーム外れる程つなぎ
胃を切った先輩として言うてやり

今治市 古野伶人

名人を夫に持って楽天家
どこもかも一度に咲いて飲み損ね

今治市 原田輝親

遊び場の無い雨の日は塾が混み
女房が稼いで俺が飯を焚き

八戸市 安田かつみ

片コトがとれたら英語詰め込まれ
議長席一言居士をまつり上げ

須賀川市 平栗金太郎

山の幸手近で過疎もまた楽し

朝の湯で目方を計る太鼓腹

寝屋川市 江口度

姪の雛飾りに母のはるばると
生コン屋の工事に生コン間に合わず

泉佐野市 大工静子

人目なくポーズのとれる春霞
彼岸参り老化見せ合う五兄弟

鳥取市 藤本鎮也

雨読また暗くなりたる灯をともし
春一番目がねに埃目立すぎ

鳥取市 藤本和宏

サイレンの音で工員吐き出され
剪定へ母は鋭い目を配り

鳥取市 藤本恵子

ポケットに母への土産路のとう
着ぶくれて女土工は旗をふり

鳥取市 藤本佳女

忽然と兄はみ仏春寒し
短日へ火のつくように兎を泣かせ

豊中市 安藤寿美子

時折は夫婦の歯車石を噛み
ふるさとは山までどっかへいっちゃった

鳥根県 安達潮音

禁煙をしてまで余生へ望みかけ
伽藍へも安座許さぬ嵐吹き

新潟県 栗和田 清子

小姑にほめられながら出す料理
嫁がきて手なべさげた日懐古する

新潟県 市川 一峯

一線を退いて温和な顔となり

足手術入院

人前は笑顔を見せて夜は泣き

大阪府 本間 満津子

年ばかりとつても判らぬことが増え

わが道を行けば山坂また楽し

大阪府 木村 濁水

春灯火辞書の文字の小さすぎ

大阪府 花田 繁子

パット咲いた桜が人をあわてさせ

大阪府 須浦 つね

お医者さん按摩器までも備えつけ

大阪府 吉野 志津

ギャンブルと切れずしがたい世を渡る

新潟県 小林 文月

民生委員機関紙「みんなきょう」編集

編集後記苦労したよう書いておき

大阪府 岡本 まさひろ

銀きせる母の遺愛を吸うてみる

倉敷市 津田 耕水

髪染めて金策に行くも妻

郷は良し種を蒔くにも人屠

兵庫県 高橋 近江

あこがれの角帽も被らず卒業し

堺市 栗本 藤持

冬物の手入老妻楽しそう

鳥取県 福田 陽山

人生のたそがれ残り火を煽り

米子市 増田 竹馬

二時間であの世へ行って戻る骨

新見市 吉田 落猿

孫進級なにつけても酒うまし

新宮市 勝 庫吉

神戸市へ転勤

神戸市 佐々木 静泉

ことばコンプレックスきょうも一日黙ってた

大阪府 鈴木 生仏

砂風呂は名前を聞かず寝て話し

大阪府 内藤 ますえ

インスタントより手作りの味まさる

大阪府 駒子

ばんしゃくのもう一てきをふってみる

大阪府 広畑 賛平

日向ぼこ女性交りて活気づき

大阪府 村島 秀村

山里の桜がまねくハイキング

川柳・中山道六十九次

(5)

富士野 鞍馬

26 芦田

望月から一里八町(四・八キロ)
芦田の城趾あり、此駅で眼薬を売る、近くの海野平(うんのたいら)は信玄と謙信との古戦場である。

更級姨捨山(さらしなおはすて)へ七里(二七・五キロ)

姨捨山の伝説については、「大和物語」に「信濃の国更級といふ所に男住みけり。若き時に親は死にければ、伯母なん親の如くに、若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂き事多くて、この姑の老いかがまり居たるを常に憎みつつ、男にもこの伯母のみ心のさがなく悪しきことを言ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、疎(おろか)なる事多く、この伯母のためになりゆきけり。この伯母いといたう老いて、ふたへにて居たり。これをなほこの嫁とこそ狹がりて、今まで死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつつも責めければ、責められわびて、さしてんと思ひなり。月のいと明

き夜「蠟(おうな)どもいざ給へ、寺に尊き業(わざ)すなる見せ奉らむ」と言ひければ、隈なく喜びて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるばると入りて、高き山の嶺の下り来るべくもあらぬに、置きて逃げて来ぬ。やといへど答(いらえ)もせで家に来て思ひ居るに、言ひ腹立てける折、腹立ちてかくしつれど、年頃親のごと養ひつつあひそひにければ、いと悲しくおぼえけり。この山の缺(かい)より、月もいと限なく明くて出でたるを眺めて、夜一夜いもぬられず悲しくおぼえければ、「わが心なぐさめかねつさらしなや、姨捨山にてる月を見て」とよみてなん、また往きて迎へ持て来にける。それより後なん、姨捨山といひける。」

とあり、川柳は

五六杯喰らって伯母を捨てに行き

門柳(三三五)

捨てられた姨もせんたい喰いぬけ

(九二)

— 信濃者大食

月を眺めて御座れよと姨を捨て

朔の目に田毎の月は凄く見え
一徳(四〇三)

亦楽(五四三)

姨捨は道のわからぬ世の話
(一四三一)

人情に欠けても月は名所也 雨且(五八二)

姨を捨て月なればこそ名所也
友尾(四一六)

おひおひと月に泣いたる名所也
玉兎(八四四)

— 月の名所になった

27 長窪

芦田から一里半(五・九キロ)

此駅の民居三四町ばかり有、相對して巷をなす。

南方の大門峠は、むかし武田信玄と諏訪の小笠原長時との合戦があった。この峠は「行者越」といい、昔、役小角(えんのおずぬ)が、はじめて此処を越えたといふ。

行者越へ世の邪を払ふ玉箒

三箱(一三二二)

行者越鬼に雑炊振まはれ 杜蝶(八四二)

小角はふたにかぶろに鬼をつれ (拾三三)

— 前鬼・後鬼という二人の鬼をつれていたといふ。

28 上和田 (かみわだ)

長窪から二里(七・九キロ) 駅の東に八幡社あり、和田義盛の霊を祭る。

和田峠は標高一五三二m、北の和田、南の下諏訪どちらからも十二キロの登り道、頂上

からは東に浅間の噴煙、西に駒ヶ岳の連山を望み、はるかに天竜川を見おろす絶景の地。峠の道は西坂峻しく東坂やすらかで、峠を隔てて東餅屋、西餅屋の茶屋があった。東餅屋だけが今も残っている。

大そうな坂森のある和田峠

独歩(二四〇)

— 和田酒盛にかけて

29 下諏訪 (しもすわ)

上和田から山路五里八町(二〇・五キロ)

中山道最長の丁場である。

諏訪の駅一千軒ばかりもあり、商人多し、夏蚊なし、少しあれどもささず、雪深うして寒烈し。と図会にある。

諏訪伊勢守三万石の城下町で、甲州街道の分岐点、中山道の要駅で、町の中に温泉があり、街道中きこえたものである。

御湯花に薪のいらぬ下の諏訪

暁丸(三七四)

旅舎多く、紅おしろいに粧ふたるうかれ女たちつどひ、とまらんせとまらんせと袖ひき袂をとりに、旅行の人の足をとむ。と図会に書かれ、このうかれ女を「針箱」といった。

針箱の謎湯女と解く下の諏訪

杜蝶(七二七)

諏訪で売る針箱みんな白く塗り

(新樽十五)

古い追分節に

諏訪の針箱二百ぢや高い

まけておくれよただ百に

とうたわれ、その相場も察知できる。

諏訪明神は、信濃一の宮として尊ばれ、上社は本宮(諏訪郡中洲村)と前宮(宮川村)とに分かれ、本宮には健御名方(たてみなかた)命、前宮にはその妃八坂売(やさかめ)命が祀られ、下社(下諏訪)には上社の二柱を主神として八重事代主(やえことしろぬし)命が配祀されてある。この両社とも春宮と秋宮とがあつて、御神霊は毎年二月から七月まで春宮に鎮座、八月一月秋宮に遷座、翌年二月にはまた春宮に遷られるのである。

御鎮座は月も名高き国内

美德(三七四)

信玄の頭をやどる諏訪の神 玉翠(四一六)

— 武田信玄は篤く信仰した

また図会に「鹿の頭を七十五組にのせ神前に供ず。又別に鹿の肉を料理しそなふ。社人も其鹿の肉を食す。他人鹿肉并に獸を喰んとする時は、此神に願ひて、社人より箸を受けて喰へば穢なしとぞいひ伝ふ。」とあり、

神鏡に七十五寄る鹿かしら

トシ丸(二六〇五)

薬くひ諏訪明神が元祖なり (玉十三義五)

諏訪の箸半いさかいで亭主かり

素鳥(傍三二)

けだ物の噂は諏訪の箸と橋

叶(二〇一四)

— 橋は諏訪湖を渡る神狐

諏訪湖・此湖まどかにして、深きところ七尋ばかりあり。めぐりに浦々ありて民家衆し。四方には山々ありて風色斜ならず、漁夫あまた有て、魚鱗をすなごる事多し。漁舟

の外船に乗ることを禁ず。この湖冬の頃より春にいたり、氷はりて尺寸も透間なく、湖一面にふさがり、年の寒温によりて、霜月のうち、あるひは師走の初より氷はりて後、人其上を通る。春も年によりて正月の末、二月の半まで氷の上をゆききす。氷の厚さ年により八九寸、一尺二三寸あり。其上を何程の大木大石を置ても破る事なし。幾千人わたりても危からず。氷のうへすべる故に櫓(がんじき)をはきて通る。其上に雪積れば、常の如くがんじきをはかす、わらんじ草履でも行く。馬はすべる故渡らず。日本中に湖多しといへども、かくの如く氷はる所なし。と図会にあり、明神の御神渡の神事に神狐が渡れば人が渡りはじめるといふ。

すわ狐が渡ったとわれもわれも

郁李(傍三二)

四ツ足で渡初する諏訪の橋

佃(一三三)

薄水をふませぬ諏訪の御神徳

佃(八一)

近道は神の恵みの厚水

亀成(八三)

厚水はって賑ふ諏訪の海

飛鳥(七六一)

霜に出来桜に消える諏訪の橋

くし市(七四)

諏訪の橋水に戻ると花が咲き

谷水(三七四)

花咲けば諏訪の親類遠くなり

(二八)

と川柳もそれを詠んでいる。

眼鏡談義

西尾 棨

私は中学校の一年生から、三十度の眼鏡をかけ初めまして、現在右眼十度、左眼九度の眼鏡をかけています。最初かけた頃は、赤銅縁の玉子型で、それから縁なしの眼鏡になり、四年生頃にロイド縁が流行りだしたので、太い黄色のロイドをかけて登校したら、長谷川という先生に、生意気だ、赤銅縁に替えて来いと、ひどく叱られたことを憶えています。私と眼鏡は一体であって、私はこの世の中へ、眼鏡をかけたまま生れて来たのではないかと、思うております。と申しますのは、眼鏡をかけた顔と、眼鏡をはずした顔が、全然違うのです。家内などは、妻の聲さんと違う見たいやというし、子供達は、お父さんは眼鏡百買やと、いうので、私はどんな時でも、眼鏡をはずしたことがありません。軍隊にいる時は、眼鏡をかけて寝ておりました。故国の夢をみる時、眼鏡なかったら、夢に見る故里がはっきり見えなからではありません。敵襲や、非常呼集の時に、眼鏡の見つからん程、周章することがなかったからです。

バーや、小料理屋へ行った時に、仲居や、ホステスを笑わす、とっておきの話があります。それは私は風呂の中でも眼鏡をかけて入ることです。事実銭湯へ行った時に、今晩はと挨拶されても、一寸はなれていると、誰方に挨拶されたのか、はっきりしない時があるのと、眼鏡一つで全然人相の違う私ですから、先方の方から、しげしげ見られて、人遣いかと思いましたが、言うことになりませんから、家風呂は別ですが、銭湯とか、温泉へ入る時は必ず眼鏡をかけて入ります。風呂の中へ眼鏡をかけて入る話をすると、ホステスは、眼鏡のレンズ曇らへんか、必らずきますが、水晶玉やから、ドイツのツァイスのレンズやからと、言うで一応納得してくれませんが、実は眼鏡を一度、水か湯につけると、其の後は全然曇りません。然しその後が面白い。眼鏡をかけていたら、顔洗う時に不便でしゅろという質問がとびだす。左様正にその通りで、この間も眼鏡かけんに入ったら、えらい失敗しでかしたのやと言うのは、一生懸命、脚を洗っていたのだ

けれど、どうも感覚がないので、おかしいな、脚気になったのと違うかと思つて、膝ボンのところを、ボンボンと二三度たたいたら、隣の人の脚やたんやというとうと、最初はマトモにうけて、きいていた連中も、マサカと言つて大笑いとなる話であります。それから、今度は頭を洗っていると、大分うすくなつてはいるが、こんなに、禿げていなかった苦やがと思つて、ツルリと撫でると、今度は左隣りのお爺さんの頭やつたというとうと、もうええ、もうええと必ず手をふられるのが、この入浴と眼鏡の私のとっておきの話であります。

冗談は、この位にして、調べてみると、眼鏡が初めて作られてから七〇〇年になるそうです。然しながら、我国では、それより七〇〇年前に、今でいう、コンタクトレンズが発明されていまして。それは、源頼朝が、奈良の東大寺で、大仏供養を行った時に、一怪漢が宿舎に、忍びこんで、彼を刺そうとして失敗したことがあります。捕えてみると、黒目の白濁した盲人でありました。然し鎌倉へ送って、詮議してみますと、実は、平の景清で、両方の黒目に魚の鱗をはめて、盲目を装うていたことが判りました。

成程こうすれば、他人には盲目に見えて氣を許されるが、当人の方からは、たとえばやけていても、様子を伺ふことが出来るわけがあります。この秘法は、伊賀流や甲賀流の忍法や、武芸書にも伝えられているということ

であります。

眼鏡が初めて、使われたと文献に出ているのは、イタリアであります。が我國のウロココンタクトは、それよりも一世紀も早く、又今日のプラスチックコンタクトよりは七世紀以上も古いことになりました。

日本に初めて、眼鏡を伝えたのは、例の宣教師の、フランシスコ・ザビエルで十六世紀の真中頃だったのです。現在眼鏡の残っている一番古いものは、京都の紫野大徳寺内の大仙院に、足利義晴の遺愛品の眼鏡が所蔵されていることあります。ともかく、昔の眼鏡の代表的なものは、大久保彦左エ門や水戸黄門さんでしょう。

面白いことに、明治初期には、「眼鏡いらんかね」と行商人が売って歩いたということ。尤も売り歩いたのは、特定の眼鏡屋が非常に少なかったためであります。我國での眼鏡つくりの元祖は、江戸の朝倉松五郎という人でありました。彼は明治六年に、政府から、オーストリアのウイーンに派遣されて、同市の眼鏡師クリュウネルトについて、眼鏡製造技術を習得しております。それまで眼鏡というと、すべて左眼用の凸レンズだけで、度数も三段階で、初めの度の弱いのを、初老、次のを中老、一番きついのを大老という、まるで幕府の役職名のような名前と呼ばれていたようであります。

「ゴールド眼鏡のハイカラは、都の西の目白台、女子大学の女学生、片手にパイオリン、

ゲーテの詩、口に唱える自然主義」というのは、明治四十年代の流行歌「ハイカラ節」の一節であります。最近では眼鏡も、色々出て、オシトン、ポストン、ウエリントン、フォックス等々で、余り変種が多くなり、専門店ではそれ以上は番号で呼んでいます。唯今では九十六種類あるそうです。

黄色い顔に眼鏡をかけて写真機をぶらさげていれば、日本人とさめて間違いないということに欧米ではなっているそうであります。佐藤前首相時代、佐藤さんが壇上で、一席ぶって、自席へ戻られたが、演壇の机の上へ眼鏡を置き忘れたそうです。このように、眼鏡を忘れるようでは、今後の政府の見通しが、ハッキリせんのじゃないかと専らの噂でした。佐藤さんの眼鏡は老眼鏡であります。

一分間の柳論

私が川柳を始めて今年で、二十五年になる。柳歴だけは人並ではあるが、決して人並の句を作っているわけではない。弓削に居た十八年間、それこそ川柳に明け暮れる毎日だった。

私をここまで引込んだものに、路郎先生の「俺に似よおれに似るなと子をおもひ」豆秋さんの「落葉ハラハラ百円札に見え」などの句の影響だったと思う。弓削駅前の路郎先生の句碑の前に立った人々は、誰もが親心はかくあらんと、川柳の持つ庶民性

私の近眼鏡であります。然し十年前程前から、老眼が入りまして、近くの新聞、雑誌を読むのに、却って邪魔になりますので、レンズの上下に動く眼鏡を使用しています。或る医者に診てもらった時に、あなたの眼は、近視と遠視が丁度一緒になって、眼鏡のいらぬ時は、九十八歳位でしょうと言われたことがありました。

眼鏡のいらなくなった時は、命の方が先になくなっていると大笑いしました。が百歳の人が日本に七十何人かいることをきいて欲をだして眼鏡のいらぬ時まで、川柳を作りたいたいものと思っております。

寄附帳へ眼鏡かけたりはずしたり 栗

福島鉄児

心に打たれたものである。川柳町が現在のように隆盛になったのも、こうした川柳が大きく現立っているものと思われる。

もし、現在のよう革新川柳が、川柳だったら、今日の川柳界は育たなかっただろうし、私自身も川柳界に飛び込んでおらなかつたかも知れない。

川柳の道は広く、明るく誰もが気軽に入れる道でなければならぬと思う。

二十五年間私は、私の信じる道を歩きつづけた。

柳界大同団結への道

池口 呑歩

本誌五月号の掌篇「無題」の中で、関美子さんが

「生意気ですが川柳はこうあるべきものという考えには賛成出来ませんし嫌です」と書いておられます。何でもないうようなこの一節に、実は、私は自分のことを言われたように一瞬ギクッとさせられてしまったものでした。怪に傷持つ身なればこそ、そよ吹く風にさえ怯えるのかも知れませんが「現代川柳」第十四号で

一、川柳作家協会の設立
二、川柳総合誌の刊行
三、川柳年鑑の刊行
四、マスコミ柳壇の開発と向上

を「四つの悲願」として世に問うて以来、この数年の間、全国の各柳誌に臆面もなくそれを訴え続けてきた私としては、大いに考えさせられざるを得なかったという次第なのです。

実をいうとこの私も、関さんのお考えに基本的に大賛成なのです。大体があまり頭の出来もいい方ではありませんから理屈は大嫌

いですし、どっちかという口よりも手の方が早い直情単純細胞的な人間で、ゴチャゴチャ言うなら川柳なんかやめつちまえて——と思想つたりそんなこともあるくらいなのです。ですから、そんな私が「四つの悲願」などということな大それたことを世に問うたり訴え続けたりするのは、一見矛盾も甚だしいように思われるかも知れません。実際、私自身、これはまたエライことをおっぱじめたもんだ、と、後悔、慚愧、忸怩たることも一再ではないのですが、だからといって今更、この「四つの悲願」を引っ込めよう御破算にしようという気は毛頭ありません。

関さん流に言えば「生意気」かも知れませんが、私に言わしむれば「四つの悲願」は理屈ではありませんし、また「川柳はこうあるべきもの」と規制する枠でもありません。川柳家として当然のギリギリ最低限の悲願に過ぎないことなので、寧ろ、今日までそれが達成されていなかったというや、そのことにそれほどの問題意識も切実感もみられないか、という川柳界の現状が不思議に思われて

ならないくらいなのです。勿論、過去にもそうした発言や運動が何度かあったことは聞いていますが。現実には昭和も五十年近くにもなるうというのに、何一つ満足には達成されていない（一昨年からやっと「川柳年鑑」が出るようになった）のですから驚き呆れるという他ありません。

しかし、ここでただ驚き呆ればかりいたのでは何の得にもなりません。また、過去のこともいろいろ複雑な事情もあるようですが、この時点でそんなことばかりとやかく言っているも際限がなく、それこそ百年河清を待つことになってしまいかねません。具体的に出来ることから何か一つでも二つでも実行に移してゆくべきでしょうが、やはり一番望ましいのは、今日の柳界を代表する大結社各自が、過去の軋轢的な経緯を捨てて、川柳の大本に帰結するということでしょう。しかし、それは言うは易く行うは難しで、それが出来るくらいならば今更らしく私如きに言われなくとも、もうとつこの昔に「四つの悲願」は達成されていたことでしょう。その難しさは私にもよく解るつもりです。元来、結社意識や派閥意識は謂わば動物の種族保存本能に根ざすもののように、どうにもしようのない宿命的なことと思われるからです。ただここで大事なことは、お互いの川柳世界においては何が「主」で何が「従」かということではいかと私は思うのです。即ち、他はともかく川柳においては、飽くまでも川柳が主で、結社や派閥は従に過ぎないはずなのです。子供

ではあるまいし解りきったことなのに、現実には案外そうでもないところが多いから困るのです。

もし「否々」と仰有られるようでしたら、もう一度冷静にお互いの周囲をよく見回してみて下さい。結社や派閥意識が主になって、肝腎の川柳が従になつているところが意外に多いことにお気づきになられるのではないのでしょうか。川柳あつての結社派閥なのに、いつの間にか結社派閥あつての川柳に成り下がつてしまつて居るのです。特に、関西柳界はその傾向が強いと風の便りに聞いておりますので、この点斯道百年の大計のためにも非常に残念でなりません。過去はどうあれ明日への川柳のために水に流す寛容と度量が切望されてならないのです。もう親の仇に目の色を変へる時代ではないはずで、私達川柳家にとつて川柳は絶対の君主であり、その前では、いかに大結社と雖もA社もB社も所詮は従の従に過ぎないのだという自覚と反省謙虚さが必要です。曾つて「××を読まざれば川柳人に非ず」とか「××を読まずして川柳を語る勿れ」といふようなことが巷間に流布されたことがありますが、今日なおそのようなことに固執するような結社があるとすれば百日の説法尻一つ、いつまで経つても旧態を脱却出来ないでしつう。お互いの生活同様に川柳界もまた多様化したのですから、一社や二社のお家大事意識だけでは、川柳の綜的な開花結実は期し難いように私には思われてなり

ません。

仮に「全国川柳作家協会」が出来たとしても、各結社の活動は自由で何の束縛もうけないのですから、他人に迷惑をかけない範囲でなら従前通り何をやっても勝手次第でしょう。では、何のためにそのような協会が必要なのかという問題になりますが、要約すれば、それは「協会」(法人)という半公共的な機関と、小は十人から二十人、大結社と雖もせいぜい三千か四千人といつた結社個々との対外的な交渉力の違いに「協会」結成の意義も価値もあるのではないかとこのことなので、全国に五百余の結社ありと雖も、その結社がでんでばらばらでは、活動力も影響範囲も限定されたかが知れたものでしかあり得ないでしょう。これらをどこかで統轄する機関を有することによって、その機能力は倍増され相応の成果も期待出来るのではないかとこのことなのです。

そうした機関をつつの足がかりとして「綜合誌」の刊行も容易ならしめられるのではないのでしょうか、もし、常時三万部の綜合誌を消化出来る機関がどこかにあれば、今直ぐは無理としても、遅くとも一年以内にその刊行を引き受けてくれる出版社が(雄山閣ならずとも)名乗りを上げてくれることでしょう。

月刊常時三万部保証ならば、必ず出来ること、この機会に敢えて断言しても毫も憚るところはあるまいと私には思われます。現在全国に何十万の川柳家がいるか定かではありませんが、たかが三万部の綜合誌一誌すら持ち

鉄道と郵便物の悪化時中の校正で、ムリを承知の二十八日送本には成功しましたが誤植が目立ち、ご迷惑をかけたことをおわびいたしました。十郎氏と大輪氏はご不快のことだつたと思います。P44上段二行目は「大正傑作老萬句」八行目は「六一」「六〇〇」同下段二十二行目は「九厘」。

P54下段二行目は「あかしや賞」。責任校了が直つていなかったり散々でした。ちょっとの食い違いで印刷がおくれたら月末発送ができなかったので、と言いわけとおわびを重ねて申しあげます。

得ずして、どうして川柳の向上発展を期すことが出来るでしょう。協会、綜合誌、年鑑、この三拍子が揃わない限りそうした百万遍のお題目も、私には何か虚しい空念仏のようと思われてならないのです。

さてそこでこの稿の結論ですが、そのための先手初めにA社とB社の握手ということですが、これもやろうと思えば決してやつてやれないことではないと私には思われるので、明治維新の薩長連合の如く、あるいは又近くは日中国交回復の如く、国際的な難事業でも天の利地の利を得れば、意外とアッサリ達成されるのですから、決して望みなき非ずといえるのではないのでしょうか、お断りしておきますが、A社とB社の確執は全国的にあるということで、問題はそこで誰が一体、坂本竜馬になり桂小五郎になり、田中角栄になり周恩来になりか、ということではないかと私は思います。

“当て込み” 仕掛人

不二田一三夫

課題吟一本の藤岡花梢さんと去る日、心齋橋の喫茶店で話あったことがある。課題吟を作らせたら川柳塔社のなかでも十指にはいる人だけに、話題は句会吟あれこれになった。

多くの句会吟攻略説に共鳴されてか、ゼヒ活字にしてほしいとのことだった。だが、向い合って一対一で意見をかわす場合は誤解をされる心配はないが、こと活字にして広く読まれるとなれば“当て込み”などの字句から誤解を生むのではないか、ちよつと心配である。“当て込み”という作句法は、邪道とされているが、ぼくはぼくなりの意見をもっている。たとえば、スポーツのきらいな選者にスポーツの句をいくら出してもボツになるだけである。もちろんスポーツぎらいの人にはスポーツの選は頼まぬことになっているが、すでにこの時点で、選者の当て込みがおこなわれているのである。選者や句者にもいろいろあって、“形”のあるものの不得手な選者も句者もいる。つまり「皿」とか「ナイフ」という“形”のあるものである。形のない題というのは「満腹」とか「おもわく」などで

ある。

ニュース性(時事吟)をきらう選者もいてみなそれぞれがうわけだ。しつこく云うようだが、時事吟のきらいな選者に時事吟を書いてどうなるというのだ。句を出す以上はなるべくボツはさげたいのが人情である。ここに“当て込み”が顔を出すのだ。

ここで声あり、

“当て込みするもしないも、選者のクセがわからないではないか”

ごもっとも。だが、毎月の本社句会のペーじをよくご覧ねがうと、各選者の選句が発表されている。これが“当て込み”の資料になるのである。こういうやりかたを邪道というのだそうだ。

かって名手水客選に泣いたことがあった。

どうにも攻略できなかったのである。そこで水客川柳を研究し、水客城攻略にかかったものだ。その後は三句出して三句ともってもらえる月もあった。これはあきらかに“当て込み”である。(水客氏に勉強させてもらったことには感謝している)

故梅志さんが、ぼくの川柳を“無手勝流”と評したことがあった。このように邪道?を行くことを指してのことだったかも知れない。

この“当て込み”の封じ策として、選者名を伏せる場合がある。だが当て込みは、そんなにいけないのだろうか。かりに、革新派の選者に伝統派の人が句を出したとする。その入選率はわるいにきまつている。ぼくの性格からいうと、そんな確率のわるいのを承知で頭を使うのはご免こうむりたい。

むしろ革新派の選者に句を見てもらえるなら、自分も革新派流の句を作って挑戦してみたい。これも勉強の一つだとおもうのだ。

革新派の選者は、伝統派の句を、「古くさくてつまらない」と、捨てるかも知れない。

伝統派の選者は、革新派の句を、

「わけがわからない」と、ボツにするかも知れない。この「わけがわからない」では句者に失礼になるから、その時はハッキリ「つま

投句に通信に

川柳塔柳箋

一冊七〇円 送料七〇円

らない句だよ」と云いきつてほしいのだ。

そんなことを考えると、選者名をはっきり打って出せば、それなりの句が書けるようにおもうのだが、どうだろうか。それでも“当て

込み”はいけないのだろうか。

どんな球でも投げてこい、みんな捕ってやるという名キヤッチャー、つまり雑学の大家が選者の場合は”当て込み”など考える必要がないこと云うまでもない。

句会で三句出すとき、古川柳に高番、中番末番とあるように、まず三才をねらう句、つぎに誰からも共感をよぶ句(家庭川柳など)そして”おんな”の句の三とおりにする。路郎選時代、月間賞杯を三年連続で獲得したのもこのテを使った、天位、平抜き共にトッポを走ったのもこのテだった。

これが邪道なら、ぼくは邪道を走りつづけていることになる。

ぼくの筆跡を知っている人が多く、その選者には文字をかえたりする。これも”当て込み”になるだろう。

ある柳社の主幹の筆跡を同人各選者が知っていて、かならず一、二句は入選させたというのを聞いたことがある。ぼくの場合は、そのような敬意を表されたおぼえはなく、むしろその逆だったかも知れない。

「川柳雑誌」時代、ある日のこと、編集会議後、句会を開いたことがある。題は、”制服”ということで、選者は葎乃先生だった。披露後ボツになった句を批評された。

「この制服の句は明治時代のもので、句にはなっているが古いのでボツにした」と、このようなことを云われたが、その句は路郎先生のものであった。葎乃先生は、筆跡で選をされなかったのである。路郎先生は苦笑されていたが

実にさわやかな選後感ではあった。

句会では、いつも「題」が問題になる。路郎選時代から、題を考えては先生にえらんでもらってきしたが、川柳塔になってからはぼくが出題してきた。毎月10題こしらえるのである。一度出したものを二度と出題しないように苦心しているが、文句をいわれるほうが多い。とくにカタカナの題は不評である。むずかしいというのだ。しかし、あるていどは外来語と取組むのもムダではないとおもっているが……。

ちよつとさからうようだが、「バレエ」という題で「洋舞」の句を作ってもらってはこまるのだ。「洋舞なら」バレエとするからである。

もう一つ、「ボーリング」なら「穿孔」で、球ころがしながら「ボウリング」として出題する。

しかし、このような、まぎらわしいものは出題してはいけないのである。新聞をよく注意して読んでいる人なら「バレエ」と「パレエ」のちがいはわかつているはずである。

忙しい時は、新聞記事や雑誌から題をとるが、雑誌の誤字をそのまま使って恥をかいたこともある。

地方の川柳大会に、「法被」「心太」「天下粉」「蛇峠とらす」という題があった。これを「はっぴ」「ところてん」「てんかふん」「あぶはちとらす」と読めるのは、大正、明治組だけではないだろうか。——こういう題を出してもこの人

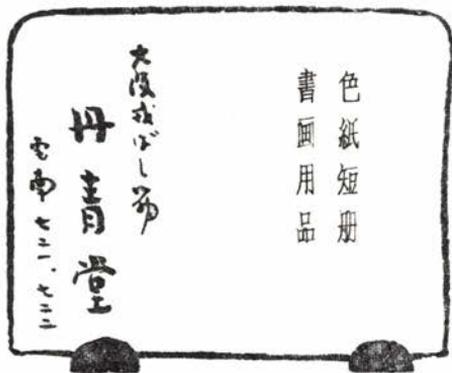
たちは文句をいわなかったようである。

さて、出来のわるい穴埋め工事も、どうやらできたらしいので、一つだけいいことを書いておこう。

「かと思ひ」などの川柳常とう語のパターンの二、三十ある。最近これだけは句会でもぼくは絶対使わないようにしている。

「わるびれず」や「逆らわず」などで結んでしまふなら、上五、中七だけ作ればいいわけ、これでは五七五の創作とはいえないと自分にそう云いきかせていることである。

延べ十数年の間、句会の出題してきたが前月から句会部の幹事諸氏にお願いすることにした。





熊野路を行く

高杉 鬼遊

「早春の海峽にぎわう」これはNHKテレビニュースのタイトルである。この画面に川柳人が出演したのである。それは遊ぶことの

大好きな川柳塔八尾支部葉の花句会と新宮「みかん」と合同で春の吟行を催した三月十八日の真昼の出来事であった。

前日の朝、熊野三号で大阪を発った三十六名。わいわいがやがや一言も二言も多い連中車内は忽ち口害の発生である。

浜木綿と雨と美人の城下町
城下町武士の気風がまだ残り
古き世をまち名に止どめ城白し
途巾着下町和歌山より美人ならぬ葵水殿様
と太茂津家老が乗り込む。

列車は快調に南国の海岸線を走る。
一四時三〇分紀勝浦駅に着く、大矢十郎氏川上大輪夫妻の出迎えを受け両氏準備のバスで那智の流へ向う。

札所から聞きあきぬもの滝の音
御神体という滝一気の人に迫まる
打ち明けぬ胸を抱いて滝に佇ち
滝口に星の凍てつく那智の山
滝壺の石のくぼみにある悟り
瓶に詰め仰山そうな滝の水

真直に流は心へ落ちてくる
集合へまだ去り難い流しぶき
体操で鍛えた娘の曲線美
古くから数多い善男善女の足跡を刻む石と
土との流道は、都会の洒れた道ではない。樹
の下に今もなお生きている道だ。高さ一三三
米さすが古来那智山熊野権現の神滝として神
聖視された靈気が肌を包む。

バスは流を離れ熊野三山の一つ速玉大社へ
参詣する。千早振るくまの宮のなぎの葉

十郎 小松園 多久志 義太郎 文秋 智子 喜一 づる枝

夕刻水野三万五千石丹鶴城々跡に建つ旅館
二の丸に着く。風呂も早々に句会が始まる。
柳宏子氏の名句会が雰囲気は最高となる。
天の句最高位から二、三位まで智子さんに独
占され、市長賞、市会議長賞等立派なトロフ
イー、桶を両手に握る。

宴会の末席女中が酌いでくれ
末席にいた宴会で見染められ
お名指しを待っている顔もある宴会
宴会のざわめきに居てふと孤独
コチコチになつて飲めない者の芸
宴会慣れしているらしい芸達者
ひととおり芸も出ました宴終る
百畳敷の大広間は五十名の宴会には少し広
すぎた。酒も廻り宴もはて、三々五々町へ行
く者、部屋に遊ぶ者、新宮の夜は静かに更け
てゆく。

要保 不二也 柳宏子 志摩太郎

をかわらぬ千代のためしにぞ祈る「藤原定家
卿の詠まれた竹柏(なぎ)の木を珍らしく見
る。

夕刻水野三万五千石丹鶴城々跡に建つ旅館
二の丸に着く。風呂も早々に句会が始まる。
柳宏子氏の名句会が雰囲気は最高となる。
天の句最高位から二、三位まで智子さんに独
独占され、市長賞、市会議長賞等立派なトロフ
イー、桶を両手に握る。

宴会の末席女中が酌いでくれ
末席にいた宴会で見染められ
お名指しを待っている顔もある宴会
宴会のざわめきに居てふと孤独
コチコチになつて飲めない者の芸
宴会慣れしているらしい芸達者
ひととおり芸も出ました宴終る
百畳敷の大広間は五十名の宴会には少し広
すぎた。酒も廻り宴もはて、三々五々町へ行
く者、部屋に遊ぶ者、新宮の夜は静かに更け
てゆく。

要保 不二也 柳宏子 志摩太郎

海峽の神秘が客をだまらせる
 海へ行くしぶきの虹に夢があり
 海の旅神代のままの水の彩
 海八丁早春の水喋べり出す
 観光の船は笑いの渦に満つ
 嘘のない流れの中の漣の音
 すれ違い手を振る人も旅心
 山も岩も太古のしじまのままに
 あの巖もこの石も欲しい海八丁
 海八丁石ころに置く酒うまし
 四国から来て海峽にしたり切る
 熊野路の早い桜に迎えられる
 べんとうがうまい海峽の水の音
 スッポンも甲羅ほしてる春の漣
 天気よし柳友よし漣の景色よし
 太陽と水のささやき漣ひかる
 松茸岩にしぶきをかけてきたジェット
 天笑
 暮れて行く淋しさ獅子岩も亀岩も
 カメラマンのハミリは漣の自然を映し、自
 然に遊ぶ吾等柳人の上をレンズが走る。
 かくて撮られたフィルムは大阪放送局へ走
 り、その夜の七時、九時、十一時のテレビニ
 ユースとなった。

おのゝ・きょう

本多柳志

◇毎日の新聞を見ているとよく人が殺され

儀一人
 牧人
 太茂津
 岳人
 美幸
 大輪
 静香
 メ女
 肖二
 酔夢
 葵水
 形水
 操子
 榊
 雀踊子
 鬼遊
 天笑

る。盗みにはいつて見つかると殺す。金を借りて其の催促がきびしいとってては殺す。別れた女に復縁を断られると殺す。スポーツ新聞までが一塁で刺されたり、マツを血でよごしたりしている。全く毎日が「絞れば血潮したたりそんな社会面」である。原則として法律というものは人の命を大切にすることにこそあるのである。ところで日本にはまだ死刑が残っている。合法的な人殺しである。法の認めるところであっては死刑というものは嫌なものらしい。其の適用はどうも慎重の上にも慎重になるようだ。一部には死刑廃止論さえある位だ。殺人にも色々あるが其の裁判の記事を見ていると、弁護士というのが居て色々と犯罪の動機や方法に、理屈をつけて其の刑罰を値切る職業人である。上手に値切るとどんどん罪が軽くなって、時には人を殺しても無罪になることさえある。考えて見ると全くおかしい。この人達は犯人の内部にまで入りこんで、つまり犯人の発想にまで干渉して、理屈をこねて其の刑罰を値切るのである。◇句会で選者がよく、ここをこう直して丁戴したいが如何ですかと言って、選者好みの句に作り変えてまで採っていることがある。文字の誤ちとか送りがないの訂正などはいとして、時には語呂が悪いとか調子が悪いとか言っている、大切な「てにをは」にまで手をつけるのが居るが、大きなお世話である。初心者は初心者なりに自分なりの発想があつて作つた筈である。選者といえども作者の発想にまでは、立ち入るべきではないと私は

思っている。語呂が悪くて、調子が悪くて気に入らなければ没にすればよからう。句の訂正には自ら限度のあることを選者は、注意すべきだと思つてどうだろう。

押し売りの善意飲めないのへ酌がれ

柳志

阪井久良伎翁と私

土井浩輔

「川柳若葉」を出していた頃、たしか昭和十一年の四月号に私の拙文「川柳縮刷版」を読まれた阪井久良伎翁から或る日突然部厚い巻紙に書かれた親書が届けられた。

早速清水白柳氏に見せたところ、白柳氏は「これはえらい物を貰つた。家宝になるから大切に保存しなさい」と言われた。

内容は私が川柳の真髄は掴み得ないと書いたことに對して懇切丁寧に御教示を賜つたものであった。

全国で幾百とある柳誌の中から僅かに六頁の「川柳若葉」に眼を通されて、後進を指導されるその御立派な態度、川柳活動の姿勢に全く驚嘆おたくわさるものを感じたのは私一人ではない。

昨年夏の水害でその貴重なお手紙を流失させたことは返す返すも残念であるが阪井久良伎翁の偉大さを必々と憶い出す昨今である。

久しぶり

舟木与根一選

久しぶり実家へ帰してぼんやりし
 久しぶり合槌打っては名を忘れ
 久しぶりねえと言われた程もてず
 味噌汁が美味いと思う久しぶり
 久しぶりに訪えば重役室に居り
 久しぶりにニックネームもなつて
 旧姓で呼んで呼ばれている握手
 噂していたら顔出す久しぶり
 御無沙汰を主客で詫びる久しぶり
 久しぶり永代供養の布施を置く
 久しぶり来て見て夢と違い過ぎ
 久しぶり小指銀指いそがしい
 前の妻久しぶりのする我が家
 久しぶり土の匂いのする我が家
 久しぶり飲んで軍歌に若返り
 もう燃えぬ二人となった久しぶり
 久しぶり訪えば後妻に手をつかれ
 流し目でちと困らせたと久しぶり
 久しぶりどちらも神経痛を病み
 久しぶり逢えばどちらも禿げ上り
 久しぶりいきなりなつかしい訛り
 久しぶり話はずまぬ距離が出来
 久しぶりやはり涙がさきにたち

松花 かつみ 寿美子 素身郎 軒太楼 洋々 暁風 英詩 球魔蘇 同 木魚 杜月 金三 悠泉 伶人 ろ亭 宵明 七面山 曉明 可止庵 十止庵

久しぶり寄れば燕と駆落ちし
 久しぶり会うて未練がまたつものり
 久しぶり会うて劣等感を持ち
 久しぶり袖を通せば藍匂う
 久しぶり焼棒杭が燃えあがり
 久しぶり中気の友を見違える
 久しぶり帰る故郷に母の味
 風態はどうやら互格久しぶり
 背信のうちみも消えて久しぶり
 つら憎いほど変つて久しぶり
 久しぶり人妻だからすぐ別れ
 久しぶり師の毒舌に無事と知り
 出稼ぎの戻る便りへ市場籠
 久しぶりあなたと若さもどす旅
 帽子取って見れば本当に久しぶり
 若き日の恋が久しぶりうずき

佳 久しぶり来たのが万座を振り廻し
 久しぶり危うく燃りが戻りかけ
 久しぶりみんな押し合う布団敷く
 遇然のドラマをつくる久しぶり
 鐘の音もその儘久しぶりの道
 久しぶり三味線ボンボンなり

人 娘の窓に唄が流れる久しぶり
 地 久しぶり心の地図を見失い
 天 久しぶりやなあと母の墓洗う
 軸 思い出の落書き煤けた部屋で寝る

代仕男 明春 国彦 同 古山 陽山 正朗 思みのる 古方 苦句 梁水 千代 芳子 不二 天涯 扇水 本陰棒 芳翁 千雅 童 千代 緑水

代読

平田実男選

誤字当て字代読祝辞書き直す
 代読の機転怒りを丸うする
 代読を濟せ自分を取り戻し
 代読の祝辞とも思えぬほど湧かせ
 代読で知事も済ませぬ義理を持ち
 棒読みにして代読の域を出ず
 代読の弔辞は本人知らぬ人
 此の次は辞める気代読で間に合せ
 よく透る声代読をたのまれる
 横文字の代読が出来秘書となり
 代読で良し知名土の名を並べ
 速慮するから代読の見くびられ
 代読が故人の名前を読み違え
 代読は喪服の似合う美人秘書
 新大臣代読などは考えず
 代読の名刺も部長代理なり

章 白 貞 祐 洋 同 扇水 曉風 魚山 カズエ 春日 英詩 古方 香珠夫 同 翁童 十止庵

若本多久志著

「凡愚のたわごと」

価六〇〇円 送一〇〇円

西尾 菜 句集

「水 鶏 笛」

送料共 六五〇円

課 題 吟

代読と知らずに聞けば堂に入り かつみ
 代読もつば心得えている 利美
 秘書課長代読馴れている 手つき 不
 代読に行くも派閥争い 緑水
 吸り泣く声に代読つり込まれ 伶人
 代読は椅子に戻って汗を拭き 松花
 代読もしてやる山の郵便屋 国彦
 代読へ少々こまけたのを選び みのる
 代読へかきこまっていた 園児 隆子
 代読の声は肚から出ておらず 寿美子
 よくよくの事代読ももらい泣き 悠泉
 肝心なことを代読読み忘れ 同
 選挙前だから代読では済まず 正朗
 点訳書友に代読してもらい 佳女

代読がとちる明治の仮名づかい 本蔭棒
 聴かせたい個所を代読よみ違え 千代
 代読は心にもない語に つまり 貞祐
 先生の代読みたいな子の答辞 暁明
 美辞麗句がすぎると代読も思い 素身郎

代読へ主催者だけが手をたたき 無人
 代読へ異議あり そうな壺の中 正朗
 代読をしてやりたいほど子が詰まり 天涯

代読を代筆したのが頼みに来 軸

庭

森下愛論選

庭越しに甚仇にくい顔をみせ 軒太楼
 恍惚の人と母家は庭続き 宵明
 庭下駄を濡らして跳んだ雨蛙 曉嶺
 庭付に住んで通勤苦労する 呑歩利
 庭に句碑建てて子孫に残す腹 七面山
 境界でもめて庭へ茄子が下り 洋々
 庭いじりする倅せな日和下駄 扇水
 お喋りが続く日和の庭つづき 柳風
 庭の木に鶯も来て鳴く有難さ 春日
 先代の人柄庭にまで溢れ 球磨蘇
 庭のない庭へ小さい鉢並べ 木魚
 裏庭の隅に子供の庭もあり 杜月
 久し振り試歩許されて春の庭 どんたく
 京の庭芝居もどきに鐘わたる 明春
 押売が裏庭に来て今日わ今日わ 利美
 庭の隅下手なゴルフが幅をとり 代仕男
 成金の嘆きは庭につかぬ若 静観堂
 庭の木木おもいおもいに葉を散も 千代
 父癒えて少々な庭もよみがえり 不二
 庭を見せたい客を今日も呼び 伶人
 雲洞にみちびかれつつお茶の庭 国彦
 定退の身を慰める庭造り 一郎
 野点する青葉の庭の緋毛氈 Patton
 菊咲いて自慢の庭を解放し Patton

庭に出て母に本心うちあける 曉童
 庭の隅金魚のお墓出来上り 豊生
 庭の石四季の移りを色に出し ろ亭
 庭ができたころ立ち退きの話が出 素身郎
 盆栽を庭にうつして水なままけ 隆子
 庭と云うほど我が町を知り尽くし 白汀
 庭掃いて掃いて掃省を待つ夫婦 梁水
 福寿草庭の隅から春を呼ぶ 落猿
 百年を歴史語らず庭の石重人
 庭箒杖にしている立ち話 寿美子
 庭いじる妻の脊中に年の波 好一
 庭もちで拾った石で庭飾る 綾女
 ままことが又庭の菊もいで逃げ 恵子
 花一杯庭に咲かせて逃つ転動 悠泉
 たんぼほも植えて若夫婦だけの庭 保夫
 掃き溜に煙のあがる寺の庭 金三

一坪の庭へ何や彼やと植え 佳女
 庭の隅をみんなさらってビルが建ち 芳子
 おめでたい話へ庭が広う見え 千翁
 庭の土足触れて見る車椅子 英詩
 一丁の缺に庭木よみがえる 綾女

庭に出て遊べと追出す庭もなし 正朗
 庭園に心のこもる箒の目 祥月
 傘さして苔庭めぐる一人旅 輝親

初歩教室

— 題「欲」 —

本田恵二朗

欲放れしたのか額の皺がとれ

伊津志

句の構成は五七五とならなくてよい。六六五もあれば、八九もあり九八もある。つまり十七音字が基本型である。破調もあり、字余りの句も許されるが、初歩教室では、基本型を会得することが大切である。この句は、九で字余りとなるが、さして気にならぬし、リズムカルでもあるので許される。この句材を次の如く表現をかえると、なんとなく面白くなる。参考にすれば幸甚である。

(欲を捨てたらかんしゃく筋が消えた)

同

よもぎ餅作る老母の無欲な手

静泉

(胃袋が欲つき再起の灯をともし)

品充

我利我利亡者欲のない子を嘆く日日

誓二

(我利我利が欲の無い子を生んだへま)

類次

小さな欲はママの乳房を放さな

類次

(欲が芽生えたぞ乳房に爪をたて)

類次

欲の皮むいた後から顔のぞき

類次

戀いだ職ようやく欲がでた模様

露杖

(職経いで三年どうやら欲を知り)

吞歩利

人生の裏街道で欲を練る

占魚

(人生の裏街道で欲を練る)

大成

人を抜き生き抜く欲がけつまずき

大成

(先頭に立ちたい欲がけつまずき)

大成

芸よりも目ざわりだなあバジ欲

大成

(名誉欲議員バジ欲が欲しくなり)

大成

野の花よ俺と同じか君の欲

大成

(草だって咲く欲もつてる俺だって)

大成

恍惚の食欲嫁を休ませず

翁童

(恍惚の食欲嫁をあきれさせ)

翁童

食欲が進み病間をほっとさせ

同

(食欲がついた病間の笑い声)

同

欲望を押さえ押えて建てた家

同

(欲望を押さええた十年ついに建て)

同

買溜めに走る商社の欲深さ

嘉道

(商欲の深さ買うて貯め買うて貯め)

無人

欲張った辛子が鼻を通り抜け

無人

(欲張った辛子が鼻から目に抜ける)

無人

夢三分七分の欲でくじを買う

同

(欲と夢七分三分でくじを買う)

同

食欲はどこか減り嗅覚鈍った

貞祐

(食欲はどこか減り嗅覚鈍った)

貞祐

欲目あわれ大器晚成まだ信じ

同

(じゃんけんて割切る欲は微笑ませ)

同

欲でないがと取るものだけは取り

同

(虎の子を株ですら虎の子株ですり)

同

不足ない年で無欲になれて欲れず

同

不足ない年で無欲になれて欲れず

同

食欲が無いのに見舞山と来る

本蔭樺

(食欲が無いのに見舞山と来る)

度

欲ばけてさぎしにころりとひっかかり

三十四

(欲ばけてさぎしにころりとひっかかり)

三十四

ベレー帽欲には縁ない顔で来る

つね

(ベレー帽無欲の見本といった顔)

つね

整形科女とてつもない欲を言う

つね

(美容整形科女の欲の底知れず)

つね

物欲色欲には限りのなきものよ

まする

(古今東西物欲色欲かぎりなし)

まする

忙しい仕事も欲と二人連れ

同

(忙しい仕事も欲と二人連れ)

同

欲があればこそ人生にむきつき

同

(欲があればこそ人生にむきつき)

同

一円で病氣直せと神だのみ

生仏

(一円で病氣直せと鈴を振り)

生仏

あの人を欲得抜きに好きになる

志津

(欲得は抜きで骨まで好きになり)

志津

ホステスに欲の皮まで好きになり

濁水

(夜の蝶に欲の皮まで好きになり)

濁水

人生の欲を冥途の旅に持ってゆき

陽山

(欲袋かついで冥途の旅に出る)

陽山

欲得をはなれて世話する仏さん

同

(根からの世話好き欲得考えず)

同

欲深い同士が闇で鉢合せ

まさひろ

(裏道で欲と欲とが鉢合せ)

まさひろ

欲なきことだけ覚える地獄耳

同

(欲なきことだけ覚える地獄耳)

同

冷蔵庫子の食欲へ明け渡し

寿美子

(冷蔵庫子の食欲へ明け渡し)

同

欲心が出て良心を見失い
 (欲が出て良心どこかに置き忘れ)
 欲の無い男律義に生き続け
 欲の皮骨肉食んで恥さらし
 (骨肉が食み合う欲のみにくさよ)
 頑固さへ無欲の無形文化財
 (人間国宝頑固と無欲の見本めき)
 欲の皮つっぱらせてる相場欄
 (欲の皮株式欄につっぱらせ)
 掴み取り欲のこぶしが抜き出せず
 恍惚も欲望だけは忘れかね
 (恍惚のまだ捨て切れぬ欲一つ)
 無欲恬淡仏のようなお人です
 (無欲恬淡仏みたいと慕われる)

好一
 同
 藤持
 保夫
 カズエ
 同
 つた
 同

欲からむ遺産相続いがみ合い
 (遺産相続欲の触手がからみ合い)
 欲望を燃やそう出世のためならば
 欲得を忘れ余生を健やかに
 (欲捨てた余生に青い空がある)
 欲望をたらぬき通す意地っ張り
 (欲望をたらぬく根性見直され)
 赤ん坊瓶のミルクに欲が出る
 (赤ちゃんの欲を育てる哺乳瓶)
 顔のしわ深くなるほど欲もふえ
 (皺深くなればなるほど欲もふえ)
 無欲だと言いつつ彼も貯めている
 (至芸かな無欲な顔で貯め続け)
 満たしても満たしても欲先行し

明春
 同
 賛平
 秀村
 駒子
 繁子
 比呂路
 佐知子

(足ることを知らない欲の虫となり)
 処女と結婚した欲ばりの人生
 放つとい欲をかくし失恋へマアあわて
 遺産分け欲を欲しくしてふくママ
 私利私欲ないと言わさぬ立候補
 そのために手段選ばぬ出世欲
 からませた欲あつさりと思破られ
 欲捨てた時に曙光が見えそめる

静観堂
 かつみ
 満津子
 利美
 同
 重人
 同

題一 流一 六月二十日締切(八月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二〇七一一

本田 恵二朗

デイスカバー東海道

橋高 董 風

本誌でもおなじみの岡田甫先生の著書「川柳東海道(下)」―大井川から京都まで―が、好評の上巻に続いて、東京都千代田区大手町一の七一、読売新聞社から発刊された。(定価八百五十円)机上の漫歩ではなく著者が何度も実地を見てまわつての報告書で、形式は単なるガイド・ブックに墮せず、紀行文や随筆でもない。それに、著者の言う、「弥次喜多の時代の人が東海道に関する知識をどの位持っていたか、それを知るのに

は、江戸の庶民詩(川柳)にまさるものはない。理由で、川柳がふんだんにとり入れられている。川柳の好きな博学多識の社会課の先生の面白い講義を聞いている感じと言った読物だ。
 巻をひらくと、のっけに歌舞伎の舞台の英雄、日本左衛門の墓が出てくる。文章は「川越し人足の肩を借りて大井川を渡り、土手上がってやや進むと八軒屋。これは人足を八組に分け、兩岸に屯させておいてからの名だから、同じ地名は対岸の島田にもある。交通量がふえるにつれて十組の小屋になつても、この地名はそのまま残された小屋になつても風、に考証的で、雑学の知識欲を大いに満たしてくる。ところで、金谷のはずれ、大井川鉄道の踏切の二本手前の狭い四つ角を左折

するとすぐ斜め右へはいる道がある。と、この本を手にはすれば実際の地を訪れるのにも便利だと思わせる程親切である。日本左衛門墓所と板屋根で覆われた墓は、小さく六十程ほどの粗末なもので、「月の出るあたりを弥陀の浄土かな」という俳句一句が彫りつけてある。「この国で左衛門と付けふといやつ(一二・34)」と川柳にも詠まれているように、彼は、いうまでもなく江戸中期では有名な盗賊の親分だ。浜島庄兵衛が本名だが、その実名を彫りつけるわけにもいくまい。とあって左衛門の兇悪ぶりの紹介となる。そして、そのうち仲間一人が京都で捕えられた。それを聞いた庄兵衛は、仲間の拷問にかけられる苦痛を救うためだったのだから、いさぎよく京都で自首して出た。(P53へつづく)

大萬川柳

「ひがみ」

入選発表

選者 川村好郎
入選 六百四十八句
七十四句

豊中古方

ひがんでる自分がおもろくな^く

愛の手へひがむ心が蓋をする
神戸静泉

大坂君子

同情が不具のひがみを深くする

過去捨てきれずひがんでるを思い
富田林美代

大坂一舟

ひがむから心の友も遠ざかり

病人のひがみが溶ける千羽鶴
富田林花梢

堺 真沙子

栄転を送ってわびしいコップ酒

私生児のひがみ噂に耐えている
鳥取豊生

大坂真砂

ひがまずに育って欲しい寡婦の夢

ひがんでる証拠に聞き耳立てた^が
大坂一栄

倉敷梁水

四面楚歌ひがむ私へ鞭となり

年寄りのひがみは猫に話しかけ
倉敷素身郎

大坂十止庵

ひがませる気はないけれど光る指

ひがんではないと^{ひがんで}も素振り
神戸どんたく

豊橋翠月

年寄りのひがみか口もききはらず

ことごとしにドルのひがみは円に向き
神戶どんたく

倉敷三林坊

ひがんでならぬ第二の母の汗

学籍が違うひがみにあるあせり
門真鉄児

大坂阿茶

鍵っ子のひがみ団らんの灯が憎い

ひがみたくもな^ま値上り急ピッチ
倉敷恵二朗

香川醉夢

ひがみなし新聞少年風を切る

金持たぬひがみが金を穢ながら
松崎利美

大坂之保

継母の取越し苦勞がなおひがみ

ひがむ杭打ち打ち登る老いの坂
松原サヨ

大坂緑水

失業がひがむ男にしてしま^い

落ちぶれたひがみで声を掛けそ^う

大坂繁子

老人の憂うつひがみと間違われ

ひがんでるようには見せ^ずも聞く

笠岡忠三

独酌のひがみに酒のほろにがい

寄付帳に素通りされているひがみ

平田代仕男

何気ない話にひがみからんで来

モナリザの微笑へ消えた子のひ^が

守口瓢太

ひがむまいわれより下もあるく^と

まま母の心ゆさぶる子のひがみ

八戸かつみ

ひがみとは言わず男の意地を張り

父のないひがみ忘れた子の積木

大坂新之助

ひがむからなおさら臺が立つ^ち

ひがむのじゃない酒場の隅を積木

倉敷扇水

ひがみもう捨て施設の灯に馴染み

プライドでカパーしている日^の

板井雀踊子

ひがみ持つ血のつながりをと恐れ

裏町のくらしが合っ^てひがまない

橋本木魚

割切れとひがむ心に鞭を打ち

もう何も言うまいひがみと言^は

倉敷里風

盆栽のひがみピンセットであ^ら

正論のつもりをひがみと笑われる

倉敷翁童

その怒りひがみだと気がつかず

餌をあせる群にもひがんでそ^う鳩

飯卓春雄

菖着てもひがんだ花でない牡丹

忠告をひがんでとられてからの仲

奈良本陰捧

ご機嫌をとればとったでまた本陰捧

ライバルに優しくされるからひ^が

岡山品充

投書欄ひがんだ筆が突く急所

ひがみたい時人形と対話する

鳥取洋々

手加減の躰けを義理と知るひがみ

零細のストも出来ない身をひがみ

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

が正当と思考するのは文化的迷信、その迷信的解釈をそのまま十七字調にまとめ、それだけで時事川柳と称する以上、川柳蔑視で、新聞記者以上の観察眼と批判力あってこそその川柳人ではあるまいかと。

離、すつきり。各三句23×3センチ白紙句箋費三百円締切七月十五日〒336 埼玉県浦和市常盤九の十四の六武藤かめ吉方埼玉川柳大会事務局。

賞、同人の部田代良氏、会員の部村山夕帆氏が受賞。▼自由律川柳一視野の乙冬氏が三月二十二日急逝。悼一京に生れて須磨の春風永久に一辞世句。

た〒920金沢市小坂町北二七一北国川柳社電話〇七六二一五二一三二一七四。▼川柳春秋四月号で時実新子氏が、或る俳句会で特選句が理解されず自解を求められて頭痛。各派の俳句会から学ぶところが多い。そしてますます川柳が好きになる。

▼生々庵主幹のNHKラジオ第一放送の川柳・老後をたのしくの放送番組が変更。六、八、十、十二月の偶数月で第四土曜午前九時十五分になった。四月二十七日新大阪ホテルで開かれた大阪ロータリークラブで主幹は川柳を講演された。この日は外人ロータリーア

▼石川県下の十団体により石川県川柳作家聯盟が結成された。構成員百三十名、文化賞、協会ニュース発行、総会等企画される。▼川柳高知四月号で川柳大いに迎える選者三氏の紹介が、大会準備の作業としては周知なものだが、その標

▼番傘四月号特集「用語の開発を考える」で十四一、のほろ、時彦、秀光の四氏が、新語、造語、略語は積極的に取入れるべきだが、一般化していないものは自然淘汰される同意見。

▼川柳研究社では今年から毎年五月に、年度表彰章を兼ねた川柳大会を開くことになり、第一回は五月二十日に行われた。▼川柳ジャーナル第二回春三賞は、中村土竜氏(津)

▼第一席「軽い日も重い日もある朝の靴」金子尚義。▼第二席「叱られた言葉は叱る頃に生き」浅田扇塚坊。▼第三席「一億の中から選った鶴と亀」山路星文洞。四十七年度川柳研究年度賞。▼第一席「喪服から蝶が生れる蛇が生れる(北海道)」。▼第二席「手に余る髪の毛」。▼第三席「死に懲がみえる枕の下の銭(東松山)」金井繁。

ンが多く特に通訳つきで好評だった。二十九日には堺南宗寺の「南北を偲ぶ」川柳大会で柳話。開会後今橋つる家の翁を偲ぶ会に摩天郎氏らと出席。藤治郎、仁左衛門、生田花朝諸氏と懇談。五月三日夜から九州へ。本社句会の七日に九州貴荘へ帰阪出席という強行スケジュールであった。

▼静岡川柳主幹榎田竹林、柳葉女夫妻の句集「鏡」が発刊された。六百円送共1700東都豊島区南大塚一〇二の一四川柳おもいで吟社柳書出版部高木九史宅。

▼柳都で第四回三太郎賞作品募集、未発表作品一人五品はがき大用紙住所氏名記入費二百円同封。発表誌百五十円締切六月十日新津市私書箱十五号柳都川柳社。▼きたぐにの事務局が変っ

▼ふあうすと川柳社五百号記念大会で薫風編集長は第二兼題「光」の選をされた。静歩、鬼遊、美幸氏が出席。盛会。

▼北海道川柳大会八月五日十一時札幌市北区七条西二丁目鉄エルム会館。雑詠二句五者共選。さつかく。つよい。ポケット。ロマンス。しずむ。特別課題「北海道」を詠う。各二句詠。切六月十日投句料三百円誌代

▼第十六回近県川柳大会は誌令二百号記念として九月二日竹原市で開催。詳細次号以後に発表。

▼第九回埼玉川柳大会七月二十九日十時、埼玉県立労働会館大講堂北浦和駅西口下車。費五百円、効果、民宿、豪快、センス、卵、距

▼川柳文学四月号で柳家徳兵衛氏が、新聞の主張だけ

▼北海道川柳大会八月五日十一時札幌市北区七条西二丁目鉄エルム会館。雑詠二句五者共選。さつかく。つよい。ポケット。ロマンス。しずむ。特別課題「北海道」を詠う。各二句詠。切六月十日投句料三百円誌代

▼第一席「軽い日も重い日もある朝の靴」金子尚義。▼第二席「叱られた言葉は叱る頃に生き」浅田扇塚坊。▼第三席「一億の中から選った鶴と亀」山路星文洞。四十七年度川柳研究年度賞。▼第一席「喪服から蝶が生れる蛇が生れる(北海道)」。▼第二席「手に余る髪の毛」。▼第三席「死に懲がみえる枕の下の銭(東松山)」金井繁。

新賛助会員

- 木村 弥栄子
- 板尾 岳人

本社 五月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

ジャンボ連休の疲れもフツとばす、元氣な顔、顔。正直いって六十名を切れると思つていたのにイスをあわてて出す始末。

栞氏の柳話は前月の小松園氏同様、いつてもやめられるように「断片集」だと前置きされたが、いずれも実のある話だ。なかでも山の川柳家として知られる板尾岳人氏の「山との対話」は興味深いものであった。いくら登山をしても、山と対話のできないような人は山を愛する資格がないという佳話。

司会の柳宏子氏という「小ばなしその一」から朗笑がわく断片集でもあった。

月間賞杯は司会と協取りのおいそが氏、西田柳宏子氏に輝く。

(河井庸佑整理)

出席 与呂志・新之助・浩輔・文秋・静馬・形水・古方・柳志・水客・一三夫・作二郎・喜風・悦郎・正彰・太茂津・三十四・たかし・酔々・幸太郎・いわを・肖二・一舟・飄太・葛城・小松園・花梢・鶴声・栞・好一・葵水・千寿子・好郎・千万里・緑水・綾女・儀一・維久子・香珠夫・美幸・柳宏子・吸江

・二三・重人・敏・岳人・誓二・俊夫・生々庵・牧人・トク子・雀踊子・庸佑・頂留子・喜美子・金三・以兆・弥生・静歩・薫風・凡九郎・凡子・鬼遊・天笑・葉子。

席題「シャツ」

野村太茂津彦

真白なシャツに倅をかみしめる 千万子
子沢山シャツ洗いにママの愚痴 たかし
倅せはシャツを白く洗い上げ 肖二
真白くシャツ洗って小さい幸 千寿子
真白なシャツに女満たされる 維久子
純白のシャツにこもる妻の情 好一
シャツ取り替えても夫気がつかず 柳志
喜びをシャツの皺に残し発ち 俊夫
我慢した涙をシャツは知っている 喜美子
鯉のぼり下でシャツの地図が揺れ 与呂志
シャツ汚れ母の来訪待つ下宿 綾女
シャツ語らず今日は物干竿に居る 凡九郎
純白のシャツが五月の風にゆれ 天笑
おふくろの便りシャツの汚れ指摘 与呂志
シャツ換えて換えて退院まだ遠く 好郎
シャツごと干した飯場の五月晴 吸江
過去消したシャツに白がまぶしすぎ 悦郎
かちかちのシャツに故郷の母思う 静馬
旅帰り女房のにおいするシャツ 鶴声
独り者シャツを洗う気になれず 儀一
六人を育てるシャツのつぎとなる 雀踊子
シワくちやのシャツ独身寮の匂い 柳宏子
新婚の寝室ピントのシャツ映え 綾女
シャツ干すまぶしい白で許される 作二郎
真白なシャツうしろめたさを横たも 凡九郎

真白なシャツに旅の夢まどか 肖二
女四十シャツのシミも気にならず 天笑
花嫁の目にシャツの白すぎて 好郎
帰省する子を待つシャツ新しく 文秋
新婚へ汚れたシャツ視かれる 小松園
太陽に汚れたシャツ紙飛ける 形水
動くたび音に目覚める紙飛ける 瓢太
父帰る報にシャツの糊をつけ 吸江
素泊りはシャツを替えただけのこと 喜美子
洗ってもベビーの匂いするシャツ 花梢
恍惚のひとつのシャツへ瞳をつむり 儀一
スタミナがなくなりシャツ汚れない 静馬
独りものシャツ乾かぬ中に夜 幸太郎
ハネムーン白いシャツが面映ゆく 多志
色もののシャツを噂の窓が干す 葵水
新婚の夢はシャツへ曇み込み 柳志
シャツ白五月の風と陽がまとも 一三夫
夜明けにはシャツはがしている寝相 飄太
顔見られぬように新婚シャツ乾す 小松園
シャツだけ替えて珍客引きとめる 俊夫
虹色のシャツに古稀の夢まどか 肖二
風呂敷の代りにシャツまで盗られ 吸江
老婆のシャツはいつもまで居り 儀一
夕焼けをシャツに包み満ち足りる 太茂津

席題「薄情」

城

一舟選

人情が薄れコツコツ金を貯め 一三夫
薄情で素通りしたと思われず 柳志
お百度を踏んでも銀行そっぽ向き 誓二
薄情をなじり自分を棚に上げ 頂留子
薄情にしたは友情と今わかり 庸佑

薄情にされて自分を振りかえる
 薄情と言われて出世に近くなり
 薄情な人に電話をかけ直し
 薄情を恨んでバカな身をいわず
 流し目は薄情などと思つてず
 いざ金となれば身内もさつぽ向き
 薄情と思つてた人に救われる
 薄情と口程にない仲であり
 六法に詳しくなつて情薄れ
 薄情な話一方だけを情薄れ
 薄情と鼻で笑つた赤い爪
 薄情な割りに金運恵まれず
 薄情な男となつて金を蓄め
 薄情にせねば集金人にもなれず
 おべんちやと言えず薄情者にされ
 薄情もため思つてと恩に着せ
 薄情な男へ犬がシッポ振り
 男とはそんなものだよ母の声
 転動をすれば賀状もはたとやみ
 薄情に馴れても寒い旅の空
 薄情でも死ねばポッカリあいた穴
 薄情な人へトボトボつて行き
 定退も近く訪れる人も減り
 金づるが薄情者にしてしまひ

花梢 千寿子 与呂志 俊夫 太茂津 葛城 庸佑 維久子 吸江 以兆 柳宏子 香珠夫 牧人 静馬 静馬 頂留子 重入 千万里 吸江 俊夫 新之助 一三夫 瓢太 舟

埋める氣の副業赤字なお増やし
 副業の方も税務署見のがさず
 趣味生かす副業本職忘れかけ
 マスコミがあふり本業忘れられ

好柳志 重人 舟

席題「副業」

村田瓢太選

二三年妻にやらして職を辞め
 副業の筈が看板書き替える
 これからは副業という別な顔
 本業はヒラで副業は先生
 副業がブームに乗つた英語塾
 儲かると言う副業にひつかり
 七光り薄れ副業に精を出し
 チョコチョコ欠勤副業ある噂
 蜜蜂のように副業貯めては
 政治家の副業汚職で手を汚ごし
 夢と利をうませる趣味を別にもち
 副業のおもちやで我が子に持たさず
 美粧院裏から夫勤めに出勤
 コンなこともしてまんねんとい名刺
 本業が多忙副業放つとかれ
 けさ衣畳んで和尚よく稼ぎ
 随筆の方で儲けている医博

俊夫 頂留子 重人 静馬 儀一 太茂津 多久志 悦郎 一三夫 頂留子 小松園 金三 葵水 幸太郎 柳志 好郎

一分間の柳論

川柳雑誌社から先生をお迎えて「まる
 べに」川柳部が誕生したのは、昭和三十
 一年であつた。それ以前私は俳句をやつて
 たが、俳句はどうも性分には合わないよう
 ので川柳部に鞍替えをした。以来結美・豆
 秋・好郎三先生に師事して今日に到る十八
 年が私の柳歴である。俳句にしろ川柳にし
 ろ十七字の短詩・あれも言いたいこれも言
 いたいとそれでは字数が足りないの、思
 いきり省略せねばならない。それに川柳に
 は俳句のように、状況をそのまま写したの

兼題「泥」

香川酔々選

脱サラを目指し副業へ精を出し
 工事場の泥公害へ気を配り
 父ちゃんも同罪泥んこの魚捕り
 歛振れば力あまって泥が飛び
 腕白の泥んこ派手に脱がされる
 泥んこになつてプリンス戻つて来
 思い出が有る泥んこを叱れない
 泥遊びママもおやつも忘れきり
 泳ぐよに晴着は泥をよけて来る
 タイヤ今日不倫の泥を持ち帰り
 泥んこになつた民話の中の母
 黙々と泥を落して過疎守る
 泥んこの道も天皇たじろかず
 阿呆は誰れやろ舗装をまたはがし
 泥んこのズボン現場のカメラマン
 泥水を飲んで悪魔に変身す

瓢太 季賛 弘生 祥月 緑水 柳宏子 どんたく 一舟 喜美子 一二三 作二郎 維久子 緑水 古方 花梢 三十四

村田瓢太

では血の通わぬものとなつてしまふ。やは
 りそこには人間の動き感情が流れていなく
 てはならぬ。よい作品をつくるには他人の
 作品を広く読み、何によらず興味を持つて
 よく見つめることが必要である。また人生
 経験の豊かさが作品に表われて個性ある句
 を生むのだと、思ふ。十八年間少し進んでは
 壁に突当り、迷路に迷ひこんで右往左往
 し、今だに一向進歩しない私である。

よく見れば苔にも花が咲いており 瓢太

泥沼に咲いても仏の花と言ひ 大路千尋子
星条旗へベトナムの泥喋べりだす 鬼遊
泥まみれになって掘つて春の化石 作二郎
数県に泥にまみれて帰りに着き 新之助
泥にまみれて労働歌などうたわなひ 俊夫
発掘の宮趾は泥に沈んでいた 作二郎
泥こねても母のかたちになつてくる 薫風
勲章はヘドロの罪を取りあげず 一舟
童貞さんふうわりと跳ぶ春の泥 薫風
泥の舟民話 悪を懲らしめる 酔々

兼題「買い占め」

垂井葵水選

店じまい 買い占めてゆく子沢山 あいき
買い占めの汚名へ 商社バツジ取る どんたく
買い占め余波に 商社の妻も泣き 弘生
買い占めへ 淋し義賊のニユースなく 章雅
買い占めの好きな社長が 買う火星 酔々
買い占めでは おまへ売り惜しむ 生々庵
政治献金 買い占めの利益とは言はず 六童子
買い占めを 社長は知らぬことにする いわを
段取りの悪さ 買い占めのせいに 失名
買い占めに 関わりもなく花が散り 水客
買い占めで 一躍社名知れわたり 瓢太
新聞にあばかれ 買い占め知る庶民 吸江
買い占めて 儲けては ぼく死んじま 葛城
買い占めて 時々覗く相場欄 いわを
買い占めに おでんの揚げも小そう 好郎
社のために 買った買い占めで 左遷され 吸江
以後 自粛だけで 買い占め劇終わり 静馬
七十五日経つて 買い占め待つても 静馬
買い占めの トップ上手に 逃げまわり 重人

アニマルに されても儲かるも 買い
買い占める 一歩手前で 金が切れ
女性みな 買い占めしたら とふと思ひ
買い占め の記事で 包んだ手 弁当
買い占め の米びとに ぎりぎり 研ぎか
買い占め てひとり で住んで 見たい島
買い占め の記事など 知れスポーツ紙
人間や さかい 買い占め をして ま
ぶさな 買い占め 紀文が 笑うてる
買い占め た方も 七十円の 豆腐籠
買い占め のあふり で 腹を さぐられ
俊夫 兆 幸 美 作 浩 一 三 凡 静 好 頂 一
夫 兆 幸 美 作 浩 一 三 夫 九 馬 一 留 留 子
水 氷 三 味 水 屋 が 忙 し っ っ っ た 屋 下 が り
ハイキングも ぐぐった 屋下がり
屋下がり 夜勤の 夫は 寝言いう
屋下がり 連休 呆けの 顔並ぶ
授業が 始まった 校庭の 屋下がり
定退が ともあま してる 屋下がり
散らかした おもちゃ へ 眠る 屋下がり
鯉の尾が グツタリ 垂れた 屋下がり
アマダくじこ っそり 回わす 屋下がり
屋下がり 隣りの 奥さん 喋りに 来
屋下がり あくび を してる 屋下がり
屋下がり ノルマ へ 焦る 汗を 拭き
ご隠居の 風呂を 楽しむ 屋下がり
遠雷へ 一と 雨ほ しい 屋下がり
雀踊子

兼題「屋下がり」

傍馬静馬選

川傍柳初篇研究▲

二月号所載の「川傍柳」初篇研究(百十五)63「石に勢あつてかたまる赤穂塩」の「石に勢あつて」は、謡曲「殺生石」の後シテの出の「石に精あり」の文句取。先行句に、「石にせいあつてかたまる四十七」「一六五」があり、「傍一」の句はその焼き直しとも考えられる。(室山三柳)

桑川柳塔社常任理事会(五月七日)

常任理事会は以和貴莊四階ロビーで開かれることになった。来年の路師忌を期して発行される同人句集は「川柳塔」とタイトルがきまる。刊行委員長は中島生々庵、編集委員は西尾葉、橋高薫風、谷垣史好、不二田一三夫諸氏。その全ぼうは近く発表します。出席一多久志・水客・柳志・文秋・静馬・形水・好郎・葉・柳宏子・小松園・古方・一三夫諸氏

油照りバスも すいてる 屋下がり 葛城
紋付の夫婦で 遅い 屋下がり 水客
映画館寝てる のもいる 屋下がり 吸江
屋下がり 青葉の風を 吸いに出る 柳宏子
うつらうつら ねむけを 誘う 金魚売 喜美子
温泉の町が シーンと してる 屋下がり 肖二
誘惑の電話が ほしい 屋下がり 天笑
二日酔い 考えついでる 屋下がり いわ庵
剪定を 考えついでる 屋下がり 緑水
クーラーの音が げだる 屋下がり 水
モナリザが げだる 笑う 屋下がり 酔々



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳たけはら

森井善居報

陽たまりの犬老いたると君のこと 姿蘭 幸
亡き母に少し似てると君のこと 文晴
あれこれと思えど矢の如し日々よ 笑子
女丈夫が女に戻っている孤独 葵水
祖父ちやんのまたはじまった若い頃 松緑
訪れた春へ昨夏逝きし女 静水
孫去んだあとの静けさ皿洗う 房子
発表会みな親ばかの顔でいる そのみ
いい船をして縁日の焼きりんご 菁居
味気ないリズム一人きりのバス 不朽
予告して何の検査かお役人 東紅
職場にもなれて通勤車の眠り 雅鳳
悪友と別れ孤独な夜に還る 英詩
孤独とはかくの如しよ日向ぼこ 文明
目標へまだ足踏みみ棒グラフ 一路
好きだ好きだ好きだふるさと。水。音
天気予報海に夫の居る限り 貞子
思い千々入学式に子を連れて 春昇
七十の旅へ冷たい春の風 鬼焼
家でさえ脱げぬ仮面が疲れさせ 西合

筋道を通せば私だけになる
どんぐり川柳会(大阪市) 谷垣 史好報
どたん場の腹案矢張り父のもの 喜風
神様が根負けしそう百度石 好郎
忍び逢い女の涙拭いてやり 小松園
人妻をおいと呼ぶなり忍び逢い 薫風
百戦へ常に危うき凡夫なり 酔々
ご馳走が出て腹案がふいになり 吸江
忌憚なく腹案述べて辞意も達し 比呂路
分別のブレキつぶれた忍び達し 弥生
腹案もあためすぎた愚痴となり 雄峯
百薬の長と上戸のうまい口 之保
うつり香をとがめる妻の眼と出合い 草春
腹案は最前列へ座を占める いわを
秒針に火薬をつめて忍び逢う 葉子
忍び逢い今日は夫も子も忘れ 悦郎
夜の景百万ドルも値が下り 鬼遊
百度石下駄が並んで待っている 岳史
新入の腹案睨閉して聞く 修史
腹案のまだくすぶっている 二次会 美幸
腹案を出さず野心に燃えて居り 儀一
百万ドルの夜景一人で見ると 真砂
オースケイ川柳会 大坂形水報
結ばれぬこの恋いつそ逃げちまえ 中西
夢だけは捨てず雑踏の世を生きる 酒井
初詣でそと結んだ凶みくじ 真人
人の世は雑踏の中踏みしめて 深川
メロドラマもめたあげけが結ばれる 鮎
雑踏の地下をぬければ青い空 健坊
結び目が解けずスランプ続いている 亜成
結ばれぬ恋代りがあるさと他人 神田

年輪を見せ角帯を結ぶ手 千夢
結び目を締め直しての倦怠期 一扇
結ばれてから内助のきついこと 常夢
母なし子鉦ちぎれても平気 聖地
夫婦にだけ分る合図の押し鉦 形水
披露宴鯛が覗いたまま結び 入仙
雑踏の流れのわれをふと気付き 好郎
川柳 大坂 児島与呂志報
妻楊枝持ってしやつくりのれんを出 胡蝶
我に似て盆裁も鉢抜けれんせず 欣々
朝食を抜いても盆裁水をやり 欣々
盆裁を賞めて商談実らせる 喜醉
根上りの松へ恩給足を止め 力泉
残雪をとかしせせらぎ春の音 洛醉
ご自慢は嫁に嫌味のない暮し 道子
モンタージュ嫌味な顔に出来上り 笑風
旅先の冗談本気に女来る 武松
禿けたのがくれば本気にしてくれず 敏
いちびりが何時か本気の子の喧嘩 呑歩利
貯金帳唯締切りを見て楽し 三十四
生きて行く手だてを笑う物価高 誓二
やんわりと急所に触れるいやな奴 本蔭棒
因縁に振り廻されて悟りかけ 徹舟
役済んでこれから弥次をとばす役 秀峰
面当てに孫に嫌味をこぼすなり 至峰
おしやべりが又立ちどまる市場籠 呂志
お人好しあつちこつちへ喋り出し 重人
和歌山七面句会 三幸報
気持よく飲んでる傍で妻の愚痴 ふうよ
姉さんと慕う従姉弟をもつ戀い 陽一
こと毎に出来る従兄弟の名を出され 清和

従兄弟来て祖母を横取りしてあまえ
東大の教授は僕の従兄弟です
従兄弟来て土産に故郷の味といる
成功の従兄弟他人の顔をする
富子
間一髪従姉妹とうまく言いのがれ
しず江
浮気でもしたい気持のカラーシャツ
芳子
例会に遅れてしばし正座する三幸
三幸

まるべに川柳会(大阪市) 村田飄太報
スキーには遅くテニスには早すぎて
とばけた味が魅力となって人氣者
エプロンを制服として城守の節子
音立てて希望湧いて来るも春一也
恍惚に挑戦するように若く逝き
寿子
経験で計れぬ早さ世の動き
扇里
うっとり小鳥ながめて老いの日々
星斗
春眠を電車の中まで運んで来
茂児
社運一新制服を派手に変え
好郎
緊逼の空気をほぐすとばけぶり
瓢太

川柳さやま 河原みのる報
金借りに来てクッションが深すぎる
越山
クッションのよさ勘定が気にかかり
ひか平
クッションが深いお辞儀にして終い
みのる
大臣の椅子に沈んで福祉論
蜻蛉
合服か冬服か訊く花だより
蕪石
教え子が地球の裏から花だより
生郎
花便りよしんば降っても来いとい
近江
花だより視察研修プランたて
素水
野次馬を満足させている棟が落ち
ゆきお
無心状花の便りも少し添え
竹堂
夜行列車どこを走るか波の音
八陣

三泊にしては会費が安すぎる 宗珠
仁王のひび割れ盛衰を泌みこませ 雅聖
癒えることない柳の寝まきまた洗う 無佐女
八尾菜の花川柳会 飯田悦郎報
人だかりまだまだ足りない前口上 美代
人だかり呑気な人の中の僕 雀踊子
人だかり迷い児へ婦警持て余し 鶴声
暗号の口笛女は見のがさず 肖二
暗号を妻の頭へ置いて来る 悦郎
仙人の夢驚かす発破音 静馬
仙人が来て知恵の輪さすと解き 酔々
仙人もやっぱり夫婦で生きている 凡九郎
仙人の呼吸に触れている行場 尚山
いたわりの気持ちはほしい倦怠期 和子
気持ちよく値引けばお客のエビス顔 誓二
気持ちだけですの包みにこの中味 儀一
気持ちの悪い程姑折れてくる 栗

一分間の柳論

或る会社の重役さんが、私の句の載った新聞を展げて「この俳句は貴方でしょう。」と私の名の「侃」から大発見をしたように話しかけられた。「これは川柳ですよ。」と言うと、腑に落ちない顔をして、五七五だから俳句でしょう、と念を押された。実は、川柳欄にあるのだから、もっとほかの質問があっても、思っても残念な気がした。然しながら、川柳も俳句も随分進化して来て、同じように詩的情緒の新鮮さと、人間の生活に直結

語り継ぐ民話に島の灯がとまり 葵水
語りせておくと一枚上わ手なり 頂留子
山語る男の胸にない煎章 岳人
蟻の塔くずれ邪恋の陽は昏れぬ 俊夫
半日を蟻が守りする留守居の子 綾女
一匹の蟻と凡人たわむれる 寿界
乳房這う蟻に死刑の罪ありや 鬼遊
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
つり渡す愛想にもある上手下手 儀一
つり銭は要らぬと女連れており 圭水
忘年会つり止めらぬほどに酔い 摩天郎
つり銭に呼び止められる十二月 宏子
つり銭の足りぬ分だけ負けてくれ 清女
つり銭を当てに子供のおよい返事 和郎
つり銭を出し流るタクシー運転手 誓二
城北明朗句会 川口弘生報
開発が隠居所の日光奪いに来 弘生

石川侃流洞

した詩を追及するようになって、その差を極端に縮め、近い将来一致するかも知れぬという現状にあつては、川柳と俳句を同一視されることも無理からぬ現状かも知れぬと思つた。
この重役さんへ、結局は、読んで貰つて、生活の真の姿を見出し、胸のどこかにピリツと来るものがあつたら川柳ですよと結んだ。これからの川柳発展段階において、大いに関心を持つ問題ではなからうかと思つた。

安静の病人日々をもてあまし
日曜日酒販売機よく売れて

今日も又昼寝とふんだセルスマン
日も暮れて近くて遠い田舎道

山仕事明日の天気は妻が見る
果物の盛り秋やくいしんぼ

恍惚の前兆やるか日を忘れ
川柳ウイロー社(ハワイ)林蒼蛇樓報

喜びに来て泣いている母の顔
再会の喜び言えずただ涙

喜びへ人目かまわず抱いて泣き
喜びで不孝許した孫の顔

喜寿も過ぎ米寿までもといわられ
喜びも電話でずます齡となり

あれこれと言わず心の嬉しそう
感情をむき出しに喜ぶ母だった

次期課長棟喜びの夢と消え
昇給を喜ぶ妻のお手料理

平和来喜びの電波西東公女
束の間の喜び求め悔残り

喜びを秘めて吾が子の帰還待ち
喜ぶ色に出さぬ筈だよばけて居り

大病の後に当った宝くじ
繁子 進 津 坊 水 ゲ 人 仏 ね 果 春 女

捕虜釈放へ喜こんで待つ親子
表彰へ喜ぶ母の笑い顔

曾孫まで集まりハッピーバースデー
川柳東大阪 竹中肖二報

枯草の下で春待つ露の臺綾女
枯草の匂いにむせるかくれんぼ

古都の春枯草焼いて東山鶴声
何かあったらしい課長の風当り

風当りいつものことかなと思ひ
貿易の黒字世界の風当り

女ひとり生きる世間の風当り
風当り猫まであほり喰って逃げ

金蔓へ朝から女セツトする悦郎
金蔓へいつか声まで媚びている

借金も金蔓もなくミシン踏む若芽
金蔓へ尻尾を振らぬのも男

寒行へ母はこたつで手を合せ好一
カレンダーのメモ母さんだけわかり

つづがなく今年も暮れるカレンダー
カレンダーあと一枚の重いこと

人生の愚痴を聞いてるカレンダー
ともすればカレンダーに追い越され

即死した母の下から無疵の子
美しい友情黙って底い合い

喧嘩ばかりしても夫婦底い合い
駒つなぎ(大阪市) 岸南柳報

留守宅に帰れば猫がじやれまわり
北風に耐える襟元立ててやり

色つきの白衣そぐわぬ年となり
新しい白衣まぶしく発つ遍路

岳 河太郎 多津緒

佳句地10選(前月号から)

児島与呂志選

二人の歩巾八月もついでくる
ボロ傘が張り替えられて戻って来

まだ欲目ふんわり残る薄化粧
アンコルなき人生をすね噛じる

ここに来て別れる筈の曲り角
嘘一つもつけない人が首になり

賞めるだけ褒めて買わない事にする
守衛室指で答えが返って来

解答がない人生朝が夜が来る
解卵器で母をさがしているヒヨコ

幾久しくと白衣の酌にあやかられ
白衣着るまでは院長好々爺

救急車の白衣お産を力づけ
生活の匂う白衣の薄汚れ

白衣脱ぎ天使変じて山の神
義務的に臨終の脈を取る白衣

インターンも白衣を着たら豪く見え
白衣着たママさん理容師若返り

看護婦の白衣無菌のように見え
胸と腕白衣に染まる白毛染

脈を取る今日は白衣の冷たい手
白衣脱ぎ自分に戻る夕の膳

白衣着て働く父の若く見え
うとうとと白衣の腕を信じ切り

白衣着て働く女の顔となり
悲しむも白衣に包んで今日を生き

宏子 潔

店主だけ白衣姿で使われる
南大阪川柳会 金井文秋報

無造作に惚れて明日のない女 俊夫
ライバルと肩を並べた頃 柳宏子
血も涙もあったコーチでいつも負け 滋雀
撫で肩のどこにひそんでいた斗志 古方
大型とさわがれていてああシンド 恒明
あっさりといびつクロは廻る音 水客
無造作な母のしぐさにある慈愛 綾女
無造作に肩した判こが命と味 水京
生活もう押にかたつて世帯地味 喜風
無造作に議員歳費をふくらませ 誓二
大型の激突土俵湧きに湧き 肖二
ごね得の前例ねばるのを教え 文秋
肩流しあって銀婚の旅たのし 三十四

初恋はふれ合う肩で燃えている 君子
無造作な夫の言葉にある温味 あいき
何も彼も図なしですよと親のぐち 鶴声
秒針へ賭けたコーチの太い眉 静歩
あっさり割切る嫁に教えられ 一舟
満足してるから無造作に髪束ね 千梢
あっさり受話器を切った後の悔 智子
大型消費島国に捨てる手が 静香
あっさり出された金は手が迷い 好一
力こぶ歯ざりしコーチまならず 儀一
肩肩ぽつかり僕には何も見えま 凡九郎
良きコーチ得て晩年に筆を持ち 市郎
無造作に冷かき合わし世帯じみ 西合
大型のわらじは仁王だけのもの 一栄
晩成の大型こつこつについてゆく 牧人

雅号ぶっちやげばなし (11)

そこう



林野 甍光

はやしの

川雉にいた佐竹彩峰氏に添われて川柳の道に這入った。がどうも駄句ばかりで路郎師にも良くお叱りを受けてた。そんな事で二十二年頃、甍光と改名したが心境を変える為めと、よみ返ると言う意の他、別に頭の光りとは関係ありません。然し急に爺さんくさい名を付けたので怪訝に思う方もあったようです。当時彩峰氏と異で「かもめ」と言う川柳誌を発刊し、四国の伍健氏他鞍馬氏又本社白柳、潮花の諸先生の御支援を得てぼそぼそやっていたが、五六年程で赤字が累積しぶつ倒れてしまった。その頃だったか竹原では川柳の芽がぼつぼつ吹き始めていた。 会社員(六十五歳)

戦前緑舟と言う可憐な号で俳句の
ようなものをやっていたが、戦後「

無造作に金を握って農夫やめ 葵水
彼女にはいと無造作に開く財布 静馬
スリの眼にこの無造作が気にかかり 千万子
母親の和裁のコーチ鯨尺 章雅
テレビでのコーチあまりに大袈裟な 八郎
観桜川柳大会(島根県) 藤井明朗報
清濁をあわせて燃える心持つ 水客
聞く方が添えて話がやっとすみ 緑之助
口下手の厚い掌たよりきに 綾美
コ下手の厚い掌たよりきに 白汀
点景とならん暮しの舟をこぐ 千代
日本海眺め心に冬がある 酔歩
山はもう眺めるだけの丸い背 英子
右左眺めガイドの口に乗る 明朗
潮時を双方ゆずらず左派と右派 孤呂二
潮時の勘が狂った株相場 秀子
感覚のずれ潮時がかみ合わず 清夢
思い出はロマン着てた花の町 孝華
あらぎを求めて着いた花の町 文子
潮時を心得産婆お茶にする 勇
潮時を考え酔えない客でいる 草丘
せつかくの眺め不酔かぶちこわし 軒太楼
潮時を婦唱夫随が歯がゆがり 弘朗
燃え殻も風と散らして去る女 車楽
意志強し燃える希望に父は負け 祥月
週末は山のいで湯で差し向い 雪美
本腰にかかれば相手あつけない 晃男
本腰をいれた瞳が物を言い 一栄

★
▼四月号以降の句報は規定の行数を守っていただきます。
(編集部)

暑中広告受付!

本誌五分の一段が千五百円グループをおもちの方も、ご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が三百円

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

▼七月七日(土)は路郎忌句会―会場 以和貴荘

▼二賞発表と同人総会は10月7日(日)の予定

(会場未定)

▼本社への不急のご用件は、なるべく書面でお願いたします。午前中と夕刻以後のお電話は06-718-3218(不二田宅)へ。

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

集 水煙抄(10句) 北川 春果 選

課題吟(各題5句以内)

「パラソル」 本庄 金三 選

「野球」 松下 梁水 選

「灯笼籠」 馬場 魚山 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かぎづかいにしてください。

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春果 選

課題吟(各題5句以内)

「眼帯」 四方天 弘美 選

「列」 永藤 弥平 選

「杖」 小川 静観堂 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社六月句会

日時 六月八日(金)午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

(今月の出題・児島与呂志)

兼題 柳話

菊 高 山 高 菊 沢 小 松 園
「リボソ」 「好泡心」 「揺れる」

川 戸 山 高 菊 沢 小 松 園
村 田 本 杉 鬼 遊 選
好 古 素 郎 遊 選
郎 方 郎 遊 選

席題 三題 当日発表

各題三句以内厳守

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

7月の兼題 「路神」 「傍酒」 「タイトロ」 「天」

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料廿)

一年分 二千四百円(送料廿)

昭和四十八年 五月二十五日印刷
昭和四十八年 六月一日発行

大阪南区鯉谷仲之町二〇番地

編集人 中島 蓬太郎

印刷所 太陽印刷株式会社

郵便番号 542

大阪南区鯉谷仲之町〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

●ペンペン草●

★6月号といえば本年も折り返し点まで来たわけ。今年こそはと力んだことがそろそろ時効になるころである。

★十数年前までは、六月一日を期して銭湯へ行くに水浴することにきめていた。雨で、寒い日もあるが、九月三十日まで、これを実行したものである。別に理由はないが、なにせ暑がりなので、汗を拭くかわりに流がし湯で水浴するわけである。

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

疲労回復・肩こり・神経痛に
効果的
食欲改善・心の安定
効果的
心身ともに健康な生活を送る



▼葉子コーナー
▼毎年六月に住々庵先生と小石農博が青垣展へ絵を出品されます。どんな図柄か、見ないことにはしていません。前展での楽しみが半減するからです。不二田様が難病の人選句数を発行日まで秘密にされるのがよく分かります。

だが、娘たちが年頃になってきたので、ストリッブは教育上よろしくないと、愚妻からクレームがついたためやめることにした。

★その後は銭湯オナリーだが、午前一時ちょっと前に家を出る。このころに行くに浴客は二、三人まじりないし、浴場内は閉店前で紙くすなども整湯とかわりがない。このフロアは大股でも屈指の広さを誇り、四、五十人はいつか収容できるといふジャンボフロである

★この広い浴場内で一人になったときの気分は最高である。石けんの汚湯などをかけられる不快さ

もなく、こちらから迷惑をかける心配もない。静かに思索にふけるダイゴは、帰宅後のペンも軽い。★この浴場で美しい話を聞いたことがある。しまいプロの常連のなかに一見ヤクザふうの四十男が中風の親父さんらしいのをときどき連れてきていた。見るともなく目をうつすとき、この男、老人の足の指、一本、一本をタオルを細くして洗っている。いくら孝行息子でも堅気の人がやれる芸当ではないと思つた。

★湯につかっている老人に、「いい息子さんですね」と声をかけたものである。「このことを老人が話をしたらしく、その後はこのヤクザふうの男、一人で来ていたがぼくの背中を流がしてくれるようになった。彼の語ることによれば、あの老人は他人だそうで、なにか世話になつたことがあつたらしい。どうやらその恩返しに浴場美談となつたようである。「その老人がつかい先日とすいで死んだそうである。

★彼は、ある夜、こんなことを云つた。彼の兄嫁が淫気をしてる現場をおさえ、カッとなって兄嫁と相手の男を斬つてしまつたそうだ。「四年ほど打たれたね」というと、「ズバリ四年でした。大將は元レコですか」と入さし指と親指を丸めてオデコのところへ持つていった。「警官ではない」と答えたが、この男、ほくをどんな人種と見たのだろうか。

★ここ二年ばかり、この男を見かけなくなつたが、パンツのとこだけ白く、全身しやく銅色だったから土工にちがいない。とすると、他の飯場へでも流かれて行ったのか、それとも、また何かコトを起こしたのか、イヤそんなことのないのだから。

★同人相集のタイトルが「川棚」とききました。刊行委員長は生々庵主幹で編集委員は美淵主幹、廣岡、奥好氏と一三夫。

★また若中伝時、よろしくお願ひいたします。
(不二田一三夫)

純良医薬

第一製薬

うちみ・肩こりに
ペタンと貼るだけ!

〈新型パップ剤〉

パテックス



●140mm x 100mm x 3枚入

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年五月二十五日 発行
大正十三年 通巻五五三号

川柳塔

六月号

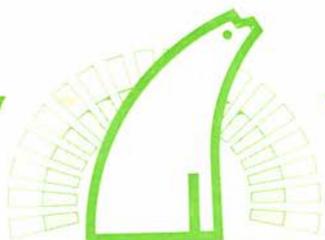
タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 100-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレース・%キー付き
16ケタメモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・メロン・パイナップル・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば



定価 二百円 (送料十六円)